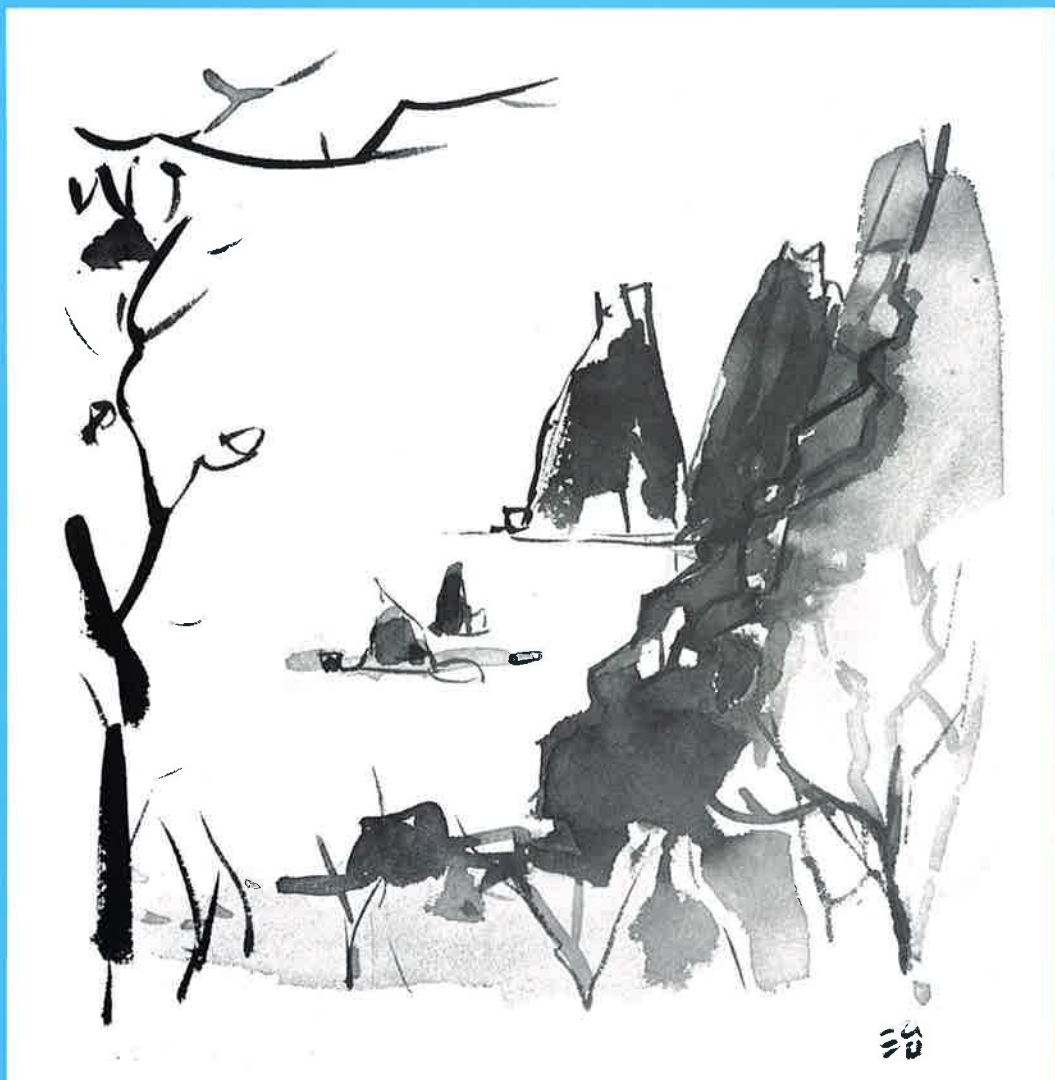


波と鳥

第 8 号 1987



室蘭市医師親交会誌

波人鳥

第 8 号 1987

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙 加藤 治良
 カット 竹内 隆一

挨拶

室蘭医師親交会三十五周年を迎えて……………会長 上田 智夫

記念寄稿

思い出の藻汐草……………長田 廣

室蘭の思い出……………稲葉 真

親交会行事略年表……………6

親交会在籍者一覧……………8

記念の写真……………12

座談会

「親交三十五年」……………16

東 栄 米沢 堡 佐藤 善弘 曾根 清孝
 大岩 昌生 原田 一洋 上田 智夫 他編集委員

臨床の窓

心臓外科における「心筋保護法」の役割とその基礎的研究……………川上 敏晃
 臨床応用の過去・現在・未来について……………23

医史

……新聞記事から……………上田 智夫……………

26

音楽の散歩道

なつメロ考——音楽における前衛と復古——…安斎 哲郎……………

30

大正っ子物語……………「時の点鬼簿」から……………加藤 治良……………

33

あんらくいす

ワルシャワにて……………稲葉 真……………

37

死の判定は三徴候で……………高橋 陽夫……………

——心拍停止こそ死の証である——……………

医療^{しごと}辺縁の周辺……………櫻庭 シゲ……………

発達行動と私の画……………吉原 暲……………

マイプラン・ニューヨーク八日間の旅……………後藤 正邦……………

MMC紀行文……………塩澤 英光……………

第21回全道ドクターズゴルフ大会に参加して……………皆川 芳徳……………

編集室へのお便り

会員異動

編集後記……………三村 博通……………

52

50

室蘭医師親交会

三十五周年を迎えて

会 長 上 田 智 夫

室蘭市医師会は昭和二十二年の新生から四十年（明治四十二年の創設から七十八年）、医師親交会は昭和二十七年の創立から三十五周年を迎えました。この間室蘭市医師会は、斉藤、宮本、中島、佐藤、原田の各会長のもとで、常に北海道医師会において重きをなして来しました。

医師親交会は、設立当時は、現在の如き保険、年金等の全盛とは異なり、一旦病氣等の不幸の際には全く保障がなかった為、長田、東、佐藤雄三（故人）先生達が相寄り、斉藤会長と協議の結果誕生した、会員の親睦、互助制度であった訳です。昭和三十六年の総辞退問題が起った時、会の預金をバックに斉藤会長は北海道医師会において、「我に闘争資金あり、総辞退何時でも決行」と胸をはったと伝えられています。

時移り世情も変り、親交会の存在意義も変わってきましたが、現在の医療関係者に非常に難しい局面において、内部の団結が一層必要な時、会員、家族を含めての親睦、或は趣味、意見等の発表の場として、親交会及び機関紙「波久鳥」の持つ意義は大きいと思われます。

本会のますますの発展と、諸先生を健康を心からお祈りして御挨拶とします。

記念寄稿

思い出の藻汐草

長田 廣

序文

親交会が発会以来三十五周年を迎えた事はまことに慶賀に堪えない。

就いては、会に關しての思い出の記をとの要請が、編輯に預かる大久保先生からあったので、筆を執る事にした。

凡そ、追憶なるものは年を経るにつれ、或いは昨日の如く鮮やかでもあり、或いは記憶の外に薄れて行くものだが、思い出すままに発足の経緯と、一部会員諸士のあれこれに觸れる事にした。

佐藤雄三氏との交友

世に合縁奇縁という言葉があるが、雄三氏こと雄さんとの出会いは、まさにそのものであった。

彼が終戦でジャカルタから帰還後、昔の泉町で内科医だった実兄の許に身を寄せられて室蘭医師会の一員となつて間もなくの事、患家での出会いがそもその事だった。

其の後どう馬が合ったものか、持ち前の、いつまでも失わない童顔を綻ばせては拙宅を訪れるのが習いとなつた。

雄さんは酒のいける口で、小生また多分に洩れず、李白の詩で

はないが一杯、一杯、又一杯と盃を重ねるうちに、自ら二人の親密の度は高まるばかりだった。

雄さんと小生との間の、酒杯のうちの歓談は尽きる事なく、或いは夜を通す事があった。

やがて日の出の刻、商売商売と掛け聲よろしく、そこは名うての酒豪の事、足許しつかと家路につきはしたものの、流石の彼も「本日休診」の札をかけてぐっすり寝込んでいたとは、後で耳にした事だった。

当方は、何喰わぬ顔で診療を続けていたのだから、呆れた話である。

徹夜の酒と言えばこんな事があった。ある年のこと、もう暮も押しつまつた頃、東君「雄さんは「輪西の村長」で通していた」その村長こと東君と二人で浜町界隈で飲み歩いた後、もう一軒と止せばいい、のに洒落れこんだ迄はよかつたが、さあ帰ろうよと腰をあげた時は、外は猛吹雪で車は動かず輪西までは帰るに帰れず、ままよと明け方まで飲み屋で明かした事があったが、村長はさうさんに奥さんから油を上げられて、もう長田とつき合うなどそれはそれはきつくお冠を枉げられたとは、これも後日彼から直接聞いた事であるが、それは当方にとっては飛んだ迷惑で、事と次第もあろう、誰が悪いという訳ではなからうに、あちら向いてもこちらを見ても悪いのは長田ばかりと、貧乏籤を引いた思いだった。しかしこれは村長一流の冗談話であらう。

なにや、かにやで、こうして佐藤・東・長田と悪名噴々、やがてはお互の厚い友情と絡んで医師会の三羽鳥と人の口の端に掛けられる事になったが、併し、はからずも親交会に深い因縁となるのであった。

親交会の発想

雄さんは、舟見町に患家が多かった。往診は、ポケットに納めた聴診器一本で「何、ほんの風邪ひきさ。越中富山の龍角散でも飲んでおけ、と言って来た」とケラケラ笑っていた。萬事この調子で、凡そ物欲には恬淡な男だった。小生の宅は彼の帰路の途中である。そんな事で舟見町帰りはよく拙宅に立ち寄られる事が屢々であった。

会えば必ず酒がつきものだったが、話と言っても之という事もなくたわいのない事が多かったが、或る夜、たまたま医師会の話が話題となった。

もともと、会には日頃関心の深かった彼の事とて、何時になく真剣な面持ちで、何ぞ会の為に役立ちたいと思うが、いい知恵がないものかとの事だった。

その折、小生が切り出した事は『会員の親睦を更に高める意味においても、会員諸士の共感共生を謀る個性的な会を新しく作らないか、素より二つの音叉が共鳴するように、医師会とは緊密な関係を持ち続ける事が必須の前提となるものだが』大体こんな話だったが期せずして二人の意見が一致し、是非実現させようと雄さんは上機嫌で帰った事である。

しかしこうして、はしなくも親交会の口火が切られようとは思ひもよらぬ事だった。

「長田君、君は秘書の要る男だね」何時、どんな折だったか、会長・斉藤先生から言われた事があったが、何となく聞き流してはいたものの、総じて億劫がりの小生には、あの夜の事はその場限りのものと思ひこんでいたところ、雄さんは日頃昵懇な輪西の村長さんと呼んでいた東君に話をもちかけ、兩人で会長宅を訪れてこの案を持ち出した事である。

所が、会長はいち早く此の案を諒として、早速医師会の理事を招集して其の趣旨を諮ったが、満場一致の賛意を得て、会員諸士

に呼びかける段取りとなった。

素より、会員の信望を一身に集めていた会長の器量、佐藤・東の兩氏の献身的な努力の種が、もともと融和性に富んだ会員諸君の土壌の上に芽生えた事は否めない事実であるが三氏なくんば、会の今日の姿はなく、もって始祖として仰がれるべきであろう。

親交会の発足

斯くて、開業医全員をもつて構成される事を建前として企画されたが、当初は会の趣旨の不徹底もあつて、ひとまずは三十三名の同志によつて発会の運びとなった。

此處に於て会を親交会と命名し、会則の作成にとりかかったが、富士銀行の手を借りて収集された参考資料をもとに会独自の会則が作られたが、猶不備な点も多く、その完成には係り役員諸氏の努力と研鑽にまたねばならなかった。

かくて会費は月額参千圓ととり決め、会計全般は富士銀行に委嘱し、事務一切は小生に委ねられ、順調に軌道に乗った。

其の間、医師会員の未加入者あるいは新規開業の諸兄に対しては、専ら東氏が会の目的と将来に対して説明と説得に専念した結果、会の存続価値が全員に浸透し、数年を待たずして市内三病院長、保健所長を加えて、開業医の全員を含めて七十余名の結束を見る事になった。

規約の面に於ても改訂に改訂を加えて、質量ともに真面目を発揮してゆるぎないものとなった。

かくて月日の経過と共に、会費の積立額も見るべきものあり、此處に於て、初めて親睦の一端として、年一回と定めて室蘭を離れて遠隔の地への旅行会が始まった。

当初はその旅行会も斉藤会長の豪放さを反映して、室蘭の綺麗

どころを携えての大名旅行とも言うべく、旅行先の医師会諸士の羨望の的となったものだった。

会の引き立て役を買って、会長・柘植・松岡の三氏によるアイヌの厚子姿でのソーラン節の踊り、会長極めつけの黒田節の舞姿が、昨日今日のように陰に浮かぶのである。

親交会の他地区医師会への波紋

昭和三十六年七月、厚生省は健保規約改革案を日本医師会に強制して来たが、日本医師会は激しく反撥し、全国医師会員一致団結のもとに反対呼応の檄を飛ばした。各地区医師会は、之を受けて執拗に反対の氣勢を挙げ、室蘭医師会でも札幌での全道医師会の反対デモ行進に参加して、意気衝天たるものがあつた。

之に対して厚生省は、反対期間中の診療報酬金の支拂停止の恐喝手段に訴えて、改革案の強行に踏みきつた。

此の報復案には、各医師会はそれぞれ停止期間中の支拂基金の立替捻出に聊かならず苦慮した事は当然の事だった。

其の際の、全道医師会長の反対強行の鳩首協議の席上で、斉藤医師会長は、我が室蘭医師会には開業医全員をもって組織する親交会なるものがあり、其の会員積立金をもって優に二ヶ月以上の立替支拂可能なる旨を披露して、同席者を啞然たらしめて大いに面目を施した事があつた。

さて其の推移はさておいて、この話は必然的に他医師会の関心を呼び、やがて室蘭歯科医師会・伊達医師会が我が親交会に倣つて同趣旨の会を作り、道内他地区医師会に於ても之に追隨するものがあつた。

之は親交会が果した一大功績でもあつた。

斉藤・大久保両先輩を偲ぶ

斉藤会長は、不世出の逸材であつた。

九期に亘る会長の職にあつて、医師会への貢献は絶大なるものがあつた。

辯の人でもあり「古き袋に新しき酒を盛る」「一粒の麦死なずば」等の聖書の句を引用して説き来り説き去る、医師会の宴会の席上和服姿での挨拶は蓋し圧巻であつた。

忘れもせぬ。室蘭市の国保組合採用に際しては、会員舉つての旗頭として反対の烽火をあげ、その熾烈さは市の係員がほとほと手を焼いたが、国是とあらば詮もない事だった。

このように一國手に止まらず政治家の一面もあつた。かるが故に、毛逐の雖よろしく道医師会長となり、やがて日本医師会の理事に撰ばれ、武見日本医師会長の懐刀としてその参謀を勤めた事は周知の事實である。

「長田君!! 僕はよく便所の中で策を練るよ」是とあれば一路邁進、寢食を忘れての活躍はやがて病魔のつけ入る隙となつた。病む身を札幌の斗南病院で養つて居られた時お見舞に参上したが、病室に案内されると開口一番「長田君、君は達者でい、な、君に会うとしみじみとした思いがするよ。僕は民芸品を自分なりに、見るものは見たつもりだが、今度は自作の陶芸をと思うが、どうやらそれも夢だろう」と眼を潤ませて居られたが慰めの言葉に窮した事だった。

其の病も小康を得られて自宅に戻られた時たまたま藍綬褒章受章の榮に浴されたが、其の祝賀会での謝辞に「自分は、平均寿命を生きたから悔いが無い」との言葉があり、引續いて今生の舞いを納めと、やがて消えんとする蠟燭の火をかきたてるような力をふり絞つての、謝禮の黒田節の舞い姿は見る人をして萬感胸に迫

り、頭を垂れさせる事だった。

やがて物故されたが、小生にとってはよき師、よき友であり、痛惜の至りだが会の為にも大きな損失であった。

民芸品に囲まれながら、自在で吊した茶釜から湯を掬っては茶を点じて飲んで居られた姿が、あのほゝゑみが髣髴として眼に浮かぶのである。

大久保洋平先生の御尊父、俳号東陽氏は、御在世中会長を勤めた宮本素風氏とともに、当時おしもおされぬ室蘭句界の重鎮であった。先生の瓢々として如何にも板についた宗匠ぶりが、匂うような面影を残して忘れる事の出来ない人である。

函館へ医師会旅行の時、函館山上での句「まんだらの雲の影置く秋野かな」が、小生の書齋に飾ってあるが、先生を偲ぶ縁である。

御物故の後の事であった。親交会のしきたりとして、米澤氏と共に御焼香に御宅に参上した時の事である。前もって御都合をお伺いしての事でもあったが、料亭からの膳部を整えられてお迎え下さられた事は恐縮の限りであった。

奥様の奥ゆかしさもさる事ながら、亡き先生の御遺徳も偲ばれて、惜しみても餘りある先生の御佛前に深々と頭を垂れての合掌であった。

高橋繁介さんの会への貢献

役員改選で、会計其の他一般事務が小生の手を離れ、庶務高橋・会計峰本と分担する事になって会の姿勢が整った。

親交会では繁さんを忘れる事は出来ない。名の通ったグルメ家で、何處、其處に新しい料理店が出来たと聞けばすぐさま出掛けて、試食してみなければ気の済まぬ男だった。勿論健啖家でもあ

ったようだが、それかあらぬか思わぬ病魔の虜となった。

日本製鋼所病院に入院したが、自分では胃潰瘍と信じ込んでいたが、実は胃の末期癌であった。手術の為、北大病院に行ったが勿論試験開腹に終り、再度日鋼病院に戻った時だった。

米澤氏と同伴して見舞に訪れた時、あの体格に褻れも見えたが、ベッドに起き上がり「早く治らなければならぬ、親交会の事があるからね」と言うのだった。不治の病とも知らぬ彼が憐れにもなり、又、彼の会に寄せる情熱に心をうたれたのだった。

氣の毒にも、まだまだの齡で逝去されたが彼の、親交会に寄せたひたむきな情熱は会に大きく貢献し、若し親交会誌が編み出される時は彼を描く事を出来ぬと思う。

峰本氏は、もともと優れた理財家で、会計事務が次第に煩瑣になるなかで、会の会計に腐心していたが、会計にはうってつけの男だった。餘技に弓をよくしていたが、札幌に移られてから物故されたとの事、痛ましい限りである。

会誌 波久島 の発刊

かくて我が親交会はゆるぎない基盤の上に順調な発展を續けて来たが、会の運行に携わるものとしては何か物足りなく、所謂「佛作って魂入れず」の憾みがあった。

会は、一つの医政機関でなく、会員の融和親交を機軸として存在の意味があるものだから、若し会誌があったならば会員各位の投稿により、間接的な会員相互の觸れ合いに役立ち、また旅行会にせよ其の他の催しにせよ、会誌に記述を残す事によってそれらの風化の防壁となるならば、後日の為に何かと貴重な資料となるだろう。

はしなくも室蘭医師会には独自の会誌がないので、その着想の

実現を願ったものだった。併し、何事によらず新しい物事を始めるには決断と人と機会が要る事だが、会の理事者に諮る事もなく徒らに年月を過した事だった。而も、宮本氏が会長の時、会誌の発行を勧めた事があったが「言い出しつべの君が始めたら」と気乗りのした様子もなく、聊か歯切れの悪いやりとりで、小生の例の億劫がりな性分も手伝って立ち消えになっていた。

即ち会誌発行の事は単なる思いつきでなく其の後も折々脳裏を掠めていたが、ついぞその機会に恵まれなかった。

ところが小生離蘭に際し、多数の親交会員による心の籠った饗の宴を忝うしたが、感激の餘りはからずも会誌の事が頭に閃き、その席上、同席の大岩理事に小生の意のあるところを披瀝して、懇々と会誌の発行を託したが、先生の努力によって発刊の運びとなった事は、氏の素晴らしい人格と会に対する情熱によるもので満腔の謝意を表する次第である。

又、誌名の撰擇に当っては、室蘭の港が白鳥灣と歌われた故事から、白鳥は如何との小生の案を採り上げられた事は光栄の至りである。

跋文

親交会の故老の一人として、刻明な会の歩みを記録として残しておく事が自分の義務としていたが、その責を果すことなく室蘭の地を離れたが、此の度、はしくもその機会を与えられた事を幸せに思う。

惜しむらくは、最上老の東氏の知恵と記憶を借り、充分な資料をもとに合作を試みたならば、それなりの思い出の記が出来上った事と思うが、今はま、ならぬ事で遺憾である。

彼東君は、なお嬰籟として五月躑躅と一杯の酒を楽しんでいる

ようだが、椿寿を祈り、会の為に一層の尽瘁方を願って止まない。雑駁な事をくだくだと書き続けたが、若し親交会史なるものが未着手であるならば、拙稿をもって契機となればと思う。

兎もかくも、晩に浮かぶ面影を残していち早く創始者の斉藤義太郎先生逝き、飲めば十八番の「小さな喫茶店」を歌っていた畏友雄さんこと佐藤氏も、青酸加里が欲しいと、死の病床に呻吟しながら姿を消すなど、嘗ての盟友が、次から次へと櫛の歯を挽くが如く一人去り二人散りして、旧は新と入れ替ってゆくが、親交会は室蘭医師会の体臭ともいうべきだろう。輝かしき永遠へ向っての発展と、会員諸士の御多幸を祈るものであり、かつは、記念誌発行に当たられた編輯者諸兄の御努力を多としながら、筆を擱く事にする。

室蘭の思い出

稲葉 真

此処に一冊の北海道医師会名簿がある。昭和四十年七月現在のもので、私が室蘭医師会から頂いた最後の名簿で、記念にもっていたものである。医師会長が宮本先生でその他なつかしい先生方の御名前が並んでいる中に、他界された先生方も居られる。

私が室蘭医師会に入れて頂いたのは昭和二十九年十一月であった。勝手気ままにして諸先生に御迷惑かけた様に思っている。それから少したって親交会に入れて頂いた。当時、一地方医師会が会員の互助と親睦を目的にこの様な会を作ったのは全国でも珍ら

しい事ではなかったろうか。当時会長は斉藤先生で、宴席で市立病院長の柘植先生、日鋼病院の松岡先生と三人でよく踊りの余興をされた。又よく旅行も行われて、道内の各名所に出かけたのが楽しかった。層雲峡、中山峠、支笏湖、オロフレ峠、函館など私にとっては初めての素晴らしい風景だった。そしてこれらの旅で一番驚いたのは酒の強い先生方が多いことで、はるかに私共より先輩の長田先生や佐藤（知）先生や北原先生などが私より元氣であった。又、若い先生方で野球部を作ろうという事で、細谷先生や曾根先生らと親交会からユニホームを作って頂いた。その「ドクターズ」と名の入ったユニホームは今も私の箆笥の奥にしまっている。

親交会と平行に思い出深い会合に室蘭民芸協会があった。会長を斉藤先生がされた関係からか医師会の先生方が多かった。米沢中村（孝）、北原、水野谷、池田、皆川各先生らがいて、全国大会のたびに京都、倉敷、佐渡、会津若松などに出かけた。そして民芸の美しさなど数多くのことをこれらの先生方から学んだ。今でも私の意識の中で一番の収穫だったと思っている。

今、貴会より「波久鳥」を何冊も送って頂いた。昭和三十三年の一万達成記念の古い写真を見る度になつかしく当時のことが眼に浮ぶ。今年四月から始ったNHKテレビのドラマ「チョッちやん」を毎朝見ているとなつかしい北海道辯が随所に出てきて、昔の唱歌を聞く様に、遠い夢がよみがえってきて胸が熱くなる思いがする。

どうか貴会の今後とも益々の御発展を祈る。

親交会行事略年表

昭和二十七年	五月一日	親交会結成。 会長 斉藤義太郎
昭和三十〇年	九月二八日	登別第一滝本館にて総会・懇親会
昭和三十一年	五月二九日	定山溪ホテルにて総会・懇親会
昭和三十三年	八月二日	洞爺観光ホテルにて総会・懇親会
昭和三十三年	七月二〇日	北海道博覧会見学
昭和三十三年	五月二二日	カルルス温泉にて懇親会
昭和三十三年	五月二四日	湯の川にて観楓会
昭和三十三年	九月二七日	クッタラ湖にて野外パーティー
昭和三十三年	二月二〇日	常盤にて一〇周年記念撮影
昭和三十三年	八月二八日	支笏湖グランドホテルにて総会・懇親会
昭和三十三年	七月二〇日	層雲峡ホテル大雪にて総会・懇親会
昭和三十三年	七月二日	定期総会にて規約一部改正
昭和四十〇年	三月二二日	斉藤前会長顧問となり新会長宮本栄一
昭和四一年	七月二六日	朝里観光ホテルにて総会・懇親会
昭和四二年	五月二三日	登別グランドホテルにて一五周年記念総会
昭和四三年	五月五日	斉藤（義）、長田、東、佐藤（雄）各氏に記念品
昭和四三年	八月一〇日	湯の川にて総会・懇親会
昭和四四年	三月二二日	宮本栄二前会長顧問となり、新会長中島勝美
昭和四四年	八月二日	洞爺湖にて昭和新年火まつり見学
昭和四五年	一月二八日	中島会長急死、後継会長佐藤善弘
昭和四五年	七月一八日	札幌グランドホテルにて総会・懇親会
昭和四六年	五月二〇日	常盤にて定期総会・懇親会
昭和四六年	二月一〇日	ニュージャパンにて忘年会

昭和四七年	五月二九日	常盤にて総会・懇親会・二〇周年記念品配布
昭和四七年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和四八年	五月二六日	常盤にて総会・懇親会
昭和四八年	七月一七日	室蘭外港めぐり
昭和四八年	二月一九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和四九年	五月二四日	常盤にて総会・懇親会
昭和四九年	七月二三日	洞爺レークホテル親睦旅行
昭和四九年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五〇年	六月二二日	登別グランドホテルにて総会・懇親会・規約改正
昭和五〇年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五一年	五月一八日	八芳園にて総会・懇親会
昭和五一年	九月一八日	栗林家庭園(恵山苑)にて野外パーティー
昭和五一年	二月九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五二年	三月二二日	原田一洋新会長
昭和五二年	五月二七日	医師会館にて総会・懇親会
昭和五二年	七月二三日	十勝川温泉、池田ワイン城、親睦旅行
昭和五二年	十一月二二日	医師会館にて二五周年記念式典 常盤にて祝賀会 長田、東、佐藤(善)、米沢、曾根、峰本、高橋 (繁) 各氏に記念品
昭和五二年	二月九日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五三年	五月二五日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五三年	七月二二日	小樽(天望閣)余市(あゆみ荘) 親睦旅行
昭和五三年	二月二三日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五四年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五四年	六月九日	湯の川若松、及び大沼大洋ホテル親睦旅行
昭和五四年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会・記念撮影
昭和五五年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五五年	六月七日	札幌センチュリーホテル、アサヒビール 園親睦旅行

昭和五五年	一月一〇日	親交会誌「波久島」創刊号発行
昭和五五年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五六年	五月二二日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五六年	六月二三日	旭川(優佳良織工芸館・買物公園) 親睦旅行
昭和五六年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五七年	五月二八日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五七年	一月二〇日	親交会創立三〇周年記念旅行(台北)
昭和五七年	二月一〇日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五八年	五月二六日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五八年	七月一六日	洞爺湖周辺(昭和新山・中島・三樹園) 親睦旅行
昭和五八年	九月二九日	秋の行楽会(本輪西サン・ロード)
昭和五八年	二月二二日	ニュージャパンにて忘年会
昭和五九年	五月二三日	ニュージャパンにて総会・懇親会
昭和五九年	六月二三日	札幌(サッポロビール園)小樽(博覧会)親睦旅行
昭和五九年	九月二二日	秋の行楽会(亀田記念公園)
昭和五九年	二月二四日	ニュージャパンにて忘年会
昭和六〇年	五月二九日	函館湯の川方面親睦旅行
昭和六〇年	六月二五日	秋の行楽会(ホテル・セピアス)
昭和六〇年	九月二二日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六〇年	二月一三日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会
昭和六一年	五月二六日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六一年	六月二八日	札幌(野幌開拓村・百合ヶ原花と緑の博覧会) 親睦旅行
昭和六一年	九月二二日	秋の行楽会(崎守町・レストラン志摩)
昭和六一年	二月二二日	室蘭プリンスホテルにて忘年会
昭和六二年	五月二七日	室蘭プリンスホテルにて総会・懇親会・記念撮影
昭和六二年	六月二四日	62年度行楽会(ホテル・サルート)
昭和六二年	二月二〇日	親交会創立三五周年記念旅行(香港)

親交会在籍者一覧

昭和62年9月30日現在

(註・同一入会年のうち)

在会者はアイウエオ順
退会者は退会年次順

入会年月

氏 名

在会者

退会年月

27・5

安立 かほり
石突 信
桜庭 シゲ
高橋 陽夫
柘植 重夫
中村 秀夫
東 栄
米沢 堡
内田 徳一
神田 正子
石井 康子
今井 真七郎
森塚 威光
仙仁 勝政
大久保 慶之助

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

29・8
30・2
33・2
34・7
37・6
37・10
42・1

入会年月

氏 名

在会者

退会年月

27・5

水野 貞寛
今井 寅雄
斉藤 義太郎
中島 勝美
中村 孝
上田 憲次
米川 元重
宮本 栄二
佐藤 知信
佐藤 雄三
神島 辰雄
古河 千代美
國本 亮平
長田 廣
大西 清
川口 柳之助
北原 隆
湊 武雄
阿部 新一
池田 洋二
遠藤 孝二
大岩 昌生
國本 鎮雄
佐藤 善弘
曾根 清孝

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

42・2
43・2
43・5
45・2
45・3
46・12
47・5
47・10
48・1
48・5
49・3
50・8
50・10
54・10
57・6
59・10
60・5
60・6
29・11

〃	〃	〃	35	〃	〃	〃	〃	34	〃	〃	〃	〃	〃	32	〃	〃	〃	31	〃	〃	〃	〃	〃	30	入会年月
			5					5						5				5						5	

鴨	上	池	阿	細	熊	山	高	黒	鈴	三	高	深	徳	千	上	松	吉	大	皆	伊	青	稻	三	狩	氏
井	田	田	部	谷	谷	中	橋	光	木	好	橋	瀬	田	葉	田	岡	井	辻	川	藤	山	葉	上	野	
清	智	満	昭		太	幸	ハ	康		晃	清	政	敬	寿	米	幸	辰	祐	英		政		敏	正	名
一	夫	穂	治	俣	市	造	ル	夫	正	二	蔵	俊	郎	良	郎	七	生	郎	貞	貢	郎	真	雄	直	

○	○	○	○		○	○		○	○	○		○				○	在会者
---	---	---	---	--	---	---	--	---	---	---	--	---	--	--	--	---	-----

			56	39	34				55	51	37				50	45	33		61	56	54	41	36	退会年月
			9	4	12				3	3	9				5	9	11		4	9	5	3	3	

〃	41	40	〃	〃	39	38	37	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	37	〃	〃	〃	36	〃	〃	〃	35	入会年月
	5	5			5	8	12									5				5				5	

大	岩	益	山	藤	開	一	平	三	河	広	成	築	高	鴨	太	飯	梶	吉	斉	加	峰	高	柴	福	氏
久	倉	田	本	田	田	方	間	村	原	瀬	松	田	橋	井	田	島	谷	井	藤	藤	本	橋	田	永	
保	秀	祐	健		吉	卓		貞	忠	欽	高	浩	昭	清	克	三	儀	正	義	治	正	繁	正	文	名
平	夫	治	郎	徹	広	郎	章	雄	男	也	明	明	三	成	英	男	一	仁	寛	良	一	介	雄	二	

○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	在会者
---	---	--	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	-----

			48	61					48	45	61	40				58				56	54	36	退会年月
			3	7					6	5	10	5				5				3	5	5	

入会年月

氏 名

在会者

退会年月

入会年月

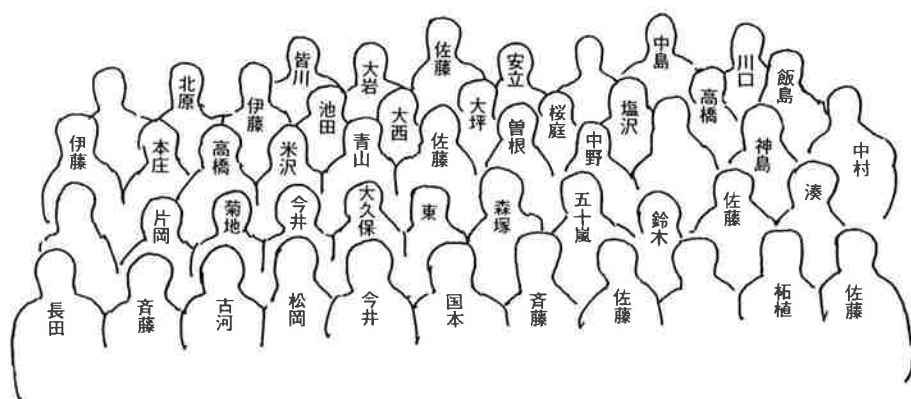
氏 名

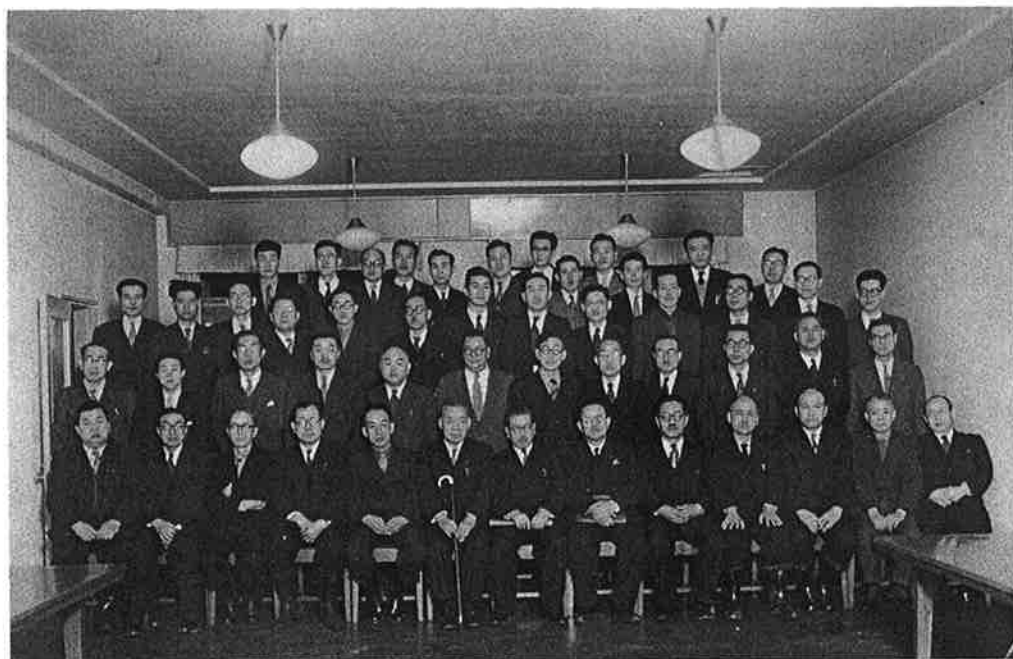
在会者

退会年月

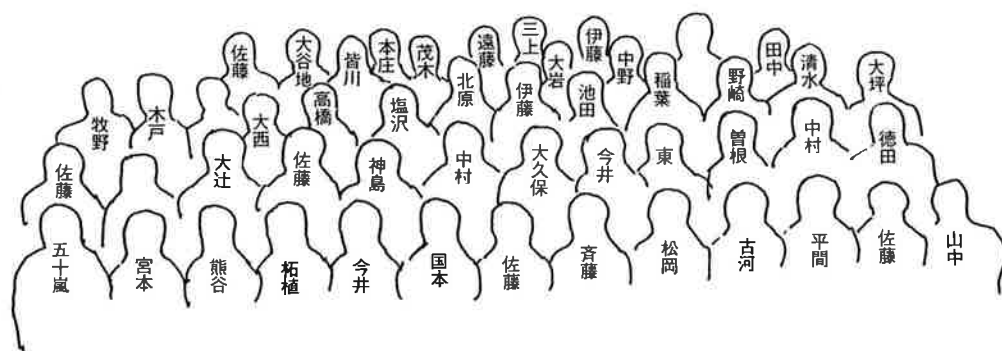


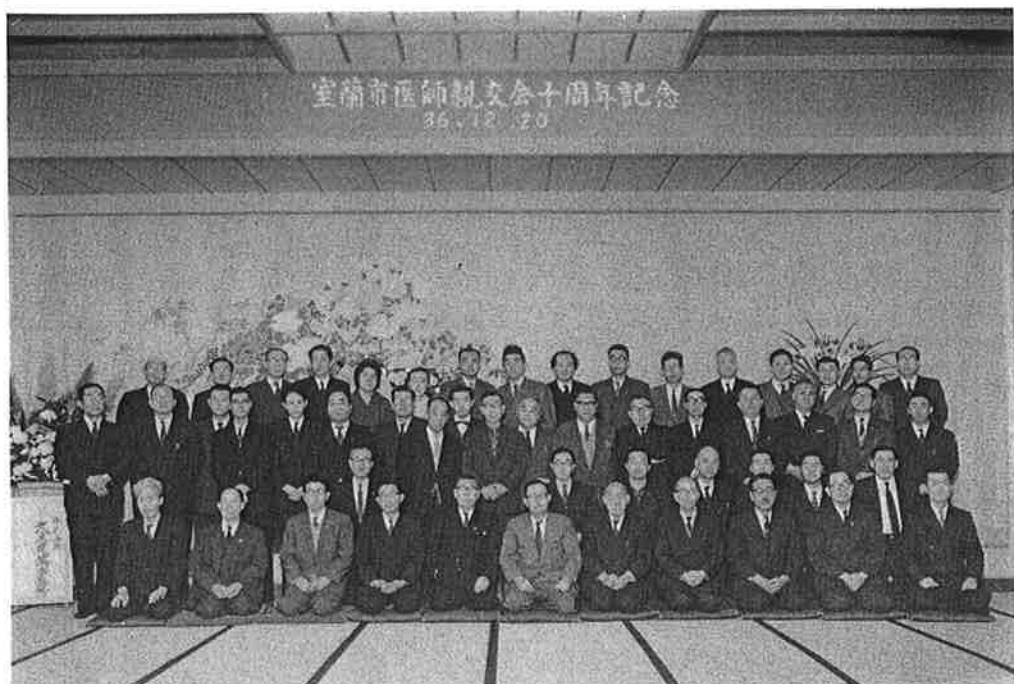
室蘭市医師会（昭和25年—30年頃）
 室蘭警察署二階会議室にて（当時千歳町。現在の中央町3丁目）





室蘭市医師会総会 昭和30年5月
(室蘭市医師会史に既掲載)



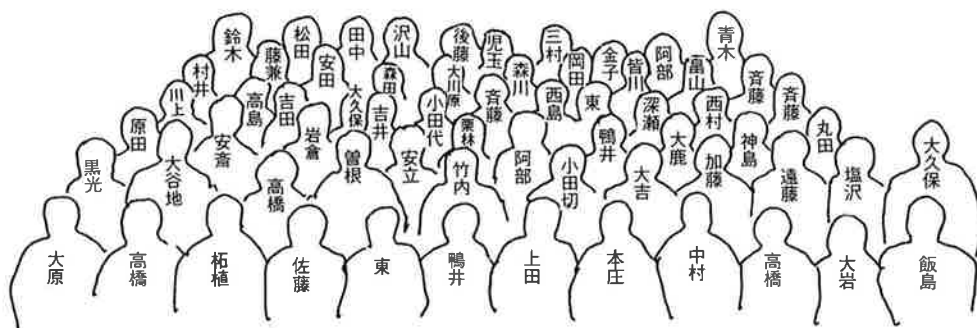


親交会10周年記念 昭和36年12月20日 常盤
(室蘭市医師会史に既掲載)





室蘭医師親交会35周年総会 昭和62年 5 月27日 室蘭プリンスホテル



座談会

「親交三十五年」

東 曾 根 清 智 榮 孝 夫 米 沢 大 岩 昌 生 堡 生 佐 藤 善 弘 原 田 一 洋
(編集委員・加藤、三村、村井、児玉、沢山、大久保、青木)

昭和62年7月22日

於、中島町「そのへ」

開会五分前

(古い写真、資料を見ながら)

東 ほう、二十九名か。

曾根 勘定してみたら定山溪に行った連中

で現存者は九人しかいない。

上田 ここに四人いるもの。

佐藤 俺、行った筈だな。

曾根 入っていない、行っていないヨ。

佐藤 どれ：見えないな、老眼鏡ないと駄目だ。

大岩 眼鏡貸しますか？……あ、これも古い

写真でネ、親交会誌には載っていないんだ。

曾根 何処かわからないけど昭和三十三年

六月か、警察が多田薬局の前にあった時。

東 あんた、一回目から入っていないかったんだね。

曾根 何ていうか、レジスタンス、抵抗し

たの。俺と池田さんと。

大岩 ゼンコも無かったんでないの？

東 大岩先生も二回目か。

大岩 幌別からの移籍でネ。あの時は苦小

牧医師会なの。

曾根 それから十周年、これ書いてないよ。

三十六年十二月二十日、常盤。写真はこれ。

米沢 常に時間に遅れる人、誰ですか。皆

揃った？ああ、それならいい。遅れてきた

らドヤシあげんばならん。(笑)

加藤 えー一言ご挨拶申し上げます。

六回目の座談会ですが去年は大雨でした。

その前の幌別はムシ暑い霧の濃い夜でした。

今日も朝からの雨なので変なジンクスがつ

かねばと思っています。

なにせお顔触れがお顔触れですので今日

の司会役に皆おそれをなしまして、実は私

も同様ですが、まあ一応私から始めます。

今も米沢先生に一発かませられまして(笑)

編集の先生方も全員司会者ですので間々で

色々お聞きして行くわけで、よろしくお願

い致します。

東先生、まず乾杯していただき、引続い

て親交会とは何なのか、どんな経緯で生れ

たのか、そんなところからお話していただ

けませんか。

三十三名でスタート

東 創刊号にも書いてますが、創立時代の

環境といえど未だ戦後の混乱期を脱してい

ない混沌の時代が続いていたわけなんです。

きっかけとなったのは、ブラザー軒が火事

で焼けた時に見舞いに行きましてネ、やは

り見舞いにいらした長田先生とバツタリ途

上で会ったんです。そこで親交会の話が出

たんです。

当時、医師会の飲ん兵衛三羽鳥と云われ



曽 根

米 沢



佐 藤



東



ていた私と長田、佐藤雄三先生と三人で色々話し合い、それをまとめて斉藤義太郎会長の処へ持っていったんです。

経済保障とか共済組織、何もない時代なんです。火災保険と生命保険だけで殊に開業医には何の保障もない時代で、もし死んだらどうするかという危惧の念は物凄くあったんです。そこで長田先生が会員の親睦をはかると同時に多少でも共済組織に近い遣り方はないものか、作ってみたらどうか。そりゃあ大変いい事だ、飲んでるばかりが芸じゃない、と三人で色々話し合ったんだが、専門知識がない。

当時、拓銀の……。

曾根 いや、富士銀行。

東 ウン、富士銀行の……名前は忘れましたが。

曾根 間野さん。(笑)

東 まあ、そういう方と相談したんです。会長も初めは、大丈夫かな、と言っていました。三千円づつかけるということでも——当時の三千円は大きいですよ。

米沢 人工流産が三千五百円。

曾根 パイプカット三千円。

東 斉藤会長やっぱり心配しましてね、毎月々々三千円積み立てて……金の問題だしな、まあ、もっと考えてみたらどうか。と慎重でしたが、まあ了承したという、そう

いう経緯でした。一番最初に草案というか原案を考えられたのが長田先生です。

最初の会員は三十三名でした。亡くなった人もいって、名簿を見ると八人ですね、今残っているのは。

◇◇ その頃の医師会員数は？

米沢 五十名ちょっと。

◇◇ その時の原案残ってますか？

大岩 高橋繁介さんが亡くなった時に紛失してたのかどうか……。

米沢 原案出されたときオレ発言した覚えあるから。入会の三年後に権利を生ずるという文章があった。死んだ時、病氣見舞、お祝金とナ。

東 ああ、これ今の規約……あんまり変わっていないんだ。

原田 大きく変わったのは登別グランドホテルの時、昭和五十年の総会でね。

大岩 米沢先生、あの時ずいぶん発言したんだよ。

米沢 前進また前進で後ろは振り返らなかつたんだ。

◇◇ その頃の会員の平均年齢は？

曾根 なんせ俺が一番若い、開業医では。

東 それから三年位だったかな、医師会と一緒になった方が便利がいいというので。

上田 善弘先生が詳しいんじゃない。中島先生のころでしたか？

司会
加藤



上田



原田

大岩



旅行・記念品

佐藤 なに？

米沢 初めは親交会長は長田さんだった。医師会長とは別だ。全会員が入った訳ではないから。

◇ 行事年表を見ますと、ずーっと旅行があるんですけど、今は利子でやつてるんですが、その頃はとうとうたんだんですか。

米沢 その積りでやっただけで常に足を出してたの。なんせ芸者なんか連れてったんだもん。

◇ 懇親会は純然たる会費で賄ってたんですか？

佐藤 はじめは金出してたよ。利子なんか無いもナ、出し合ってたよ。

◇ 会費はいくら位でした？

東 安い安い。

佐藤 五円くらいだったかな。(笑)

米沢 それは戦前だ。もう戦後だもの。

曾根 常盤や粹月で千五百円くらいさ。

それでも医師会の宴会費が一番高かった。

米沢 はじめはホレ、あそこ、粹月を使ってたんだ。そうしたら新日鉄とぶつかった。

先に申込んでるのにオミットされて二時間待って言うんだ。斉藤会長、怒る、怒る。それ以来常盤だけになったんだ。

◇ 泊りで千五百円ですか？

曾根 えっ、いやいや宴会だけさ。

◇ 第一回の懇親会は第一滝本ですね。この時はいくらでした？

佐藤 金とられる時、ずいぶん安いな、と思っただ。

米沢 出席しない人には必ずお土産渡したもんだ。

◇ 宴会のパターンはいつも芸者さんが居たんですか？

東 うん、そうさ。

曾根 女給はいなかったもん。

米沢 買切りで連れてったもん。

◇ え？連れてったんですか。

(三人いっしょに、あ、そうだ、連れてったんだ) 笑……

曾根 層雲峡に連れてったのが最後かな。

米沢 層雲峡だったか湯の川だったか、外に何処だったか飲みに出て、鍵かけられて別な旅館に泊まった。(笑)

佐藤 それは初めて聞いたな。

東 あの当時、四十年頃の積立金は三千万だったナ。

米沢 一千万出来た頃に、何か記念品やろうって事になったんだ。

曾根 三回貰ったナ。南部鉄瓶も貰った。

米沢 南部鉄瓶でない。カンチだ！

原田 金沢の有名なカンチの鉄瓶さ。

曾根 鉄瓶と額に入った鏡、それと博多織りの財布、三回貰ってる。

米沢 四回やつてるヨ。

大岩 「軸」を貰ったよ。

◇◇ 昭和三十九年七月に規約改正とあります、これは？

米沢 俺はそういう事務的な事は一切……。

(笑)

曾根 昭和三十六年十二月二十日に十周年記念やつてるの。年表に載ってないけど、これ写真。

二十周年、二十五周年、三十周年こんど

三十五周年。次は四十周年だなア。(笑)

原田 どう、記念品出さないのかい。

三人の会長

曾根 俺は一回目に入る権利あったけどネ反乱起して池田耳鼻科さんとオレ、入らなかったの。

米沢 そういうクズも居たの。(笑)

大岩 俺の所は三十年に室蘭医師会に入っ
て、その時ぞろっと何人かネ。だから二期
生さ。

曾根 俺達は青年行動隊さ。こっちは老人
さ、文句ばかり言うの。

◇◇ 総辞退運動が起った時、斎藤会長が
道医師会で大見栄を切ったという話、あれ

は親交会があつたればこそ、ですな。
大岩 うん、あれは有名だったな。

曾根 室蘭だけは強かったんだ。

米沢 代議員は俺と松岡さんと。

原田 それと豊浦の矢野先生とネ。

米沢 親交会には基金があるもんだから、
会長は道医師会に行つて我々は基金を持っ
ている、とね。そりやあもう、会長すつか
り男を上げたよ。ほかの医師会で真似した
わけだヨ。

東 銀行から金借りた医師会もあつたんだ。
米沢 こっちは支店長の確約とったんだ。
資金は何時でも貸しますと……借金ではな
いんだ。借入れの約束だよ。

◇◇ 実際に借りた事はないんですね。
上田 「見せ金」さ。

◇◇ 斎藤先生の次に会長になられた宮本
先生はどう云う方でした？

米沢 おとなしい人でネ、皆さん楽しくや
りましょう、という人だった。

東 俳句やつてたんだ。旅行に行つてもネ。

原田 湯の川でもやつてた。

曾根 うん、吟行さ。

米沢 会計もやつてたナ。

佐藤 俺もやった。

曾根 善弘先生が会長だった時が俺さ。

原田 会計つて云えば、あの峰本先生がや
つてないと今の額にはならなかったネ。

米沢 計算細かいんだ。話聞いてて頭痛く
なつて来た。

大岩 だいぶ後の話だけど一度、外部監査
せよという事でやったの。又聞きだけでも
実に理路整然と一円の間違いもなかったん
だつて、ウン。

原田 善弘さんと曾根さんが続けていたら
わかんないナ。(笑)

東 会計士のEさんが見てくれたのは――

上田 あれは善弘先生の時代じゃない？細
川のちっちゃんがやつてた時。

◇◇ 中島先生つて方は私よく知らないん
ですけど、宮本先生のあとですね。一年足
らずで亡くなられたんですね。

佐藤 一月の十五日に総会の宴会があつて
ネ、その次の日、脳出血で倒れたんだ。

曾根 俺、市立に居たでしょう。院長にも
相談したんだけど中島先生の一言で決めた
の。「ああ、お前すぐ辞めろ、開業開業」
つてネ。

原田 中島先生の葬式の忌中引きの日の夜
がボクの病院の披露パーティさ。時間ずら
して市民会館でやつたけど、みんな、黒の
ネクタイを普通のネクタイに替えてさ……
一方井先生が熨斗袋ないからってサラでお
金を出すの。

大岩 二日前に、俺と繁介さんと何か会長
に言わんけりやならん事あつて行つたの……

話し終ってから飲んだんだ。三人でダルマ二本倒して、それから外に行ったんだよ。だから俺、奥さんの顔を見られなかった。

上田 佐藤先生、すぐ駆けつけたんでしょ。そして「善弘、頼む」って……。

佐藤 「頼む」って言われて俺「うん」と言ったんだけど、子供さんの事だと思って帰ってから女房に「子供何人いるんだ」と聞いたんだ。医師会のこと頼むって言ったのさ。

米沢 医師会館つくったの中島だもの。会議のとき、任せてくれたって言われて俺反対した事あったんだ。そんな訳の分からない話ダメだって、俺一人反対したの。ケンケンガクガクってやるもんだから、米沢と中島はぐるになって喧嘩しているんじゃないか、って話が出たんだナ。

ゴム紐売りが伸ばしたり縮んだりさせて、十尺買った積りが六尺しかなかったなんて、それが分らんで一任するって事あるか。もつと話固めてからやり直させて。(笑)

東 中島会長がね、親交会はやめちまえて言うんだ。あんた覚えているだろう、俺とやり合ったの。

大岩 いやあ、俺そういうの知らんなあ。東 親交会はいらん、医師会の中の一部でいいって言うんだ。いや、親交会の成り立ちはそんなもんじゃない……ホレあんた

と三人で、あそこの店でサ。

原田 掴み合いやったって云うんでしょ。東 そんな事しないよ。

原田 昔は激しかったって云うよ。

佐藤 あれはね、佐藤雄三先生と長田さんはね、会議っていうと……おいおい、まだそれ食ってないぞ、片付けるなよ。(笑)

昔と今

大岩 いま俺は何にでもしやしり出てるから、ずーっとやつてる様だけど、初めて仕事やらされたのは昭和五十一年の栗林家庭園の野外パーティなんだ。東先生に押しつけられたんだ。

東 高橋繁介先生と飯を食べた時に、親交会もいろんな批判があるからアンケートをとろうじゃないか、ということになってネ。その頃だよ。

佐藤 あのアンケートはね、半分も返事が来ないんだ。「突然あんなこと聞かれても困る」って電話来るから、そのとき賛成か反対かって聞くと賛成するって……そんなのもあったけど。

大岩 あの頃はね、長田、米沢、東先生の三人で全てやっていたでしょう。俺、役員になったとき何でもかんでもやらされちゃ大変だと思って、この組織表を作ったのさ。

◇◇ 当時は今みたいな行事委員会は無かったでしょう。何かをやる時はどういう風にして決めたんですか？(笑)

原田 おそらく幹部だけで飲んでて、今度あそこへ行こうや、って調子さ。一番民主的だったのさ。(笑)

◇◇ 今はね、計画を立てて綿密に検討して決めているんです。

曽根 財産多くなれば、そうしなけりや駄目なんだナ。

米沢 昔は金の事あんまり考えてないんだ。大岩 金の価値も変わったヨね。斉藤会長の時代、三千万たまったら銀座へ行つて飲もうやって事になったんだ。(笑)

上田 まだあったんでない？いくらだか貯ったらハワイに行くって。(笑)

曽根 五千万さ。

東 斉藤会長は金の事考えないんだ。

◇◇ 現代風の親交会とのギャップですね。原田 最近の旅行参加者は少ない様な気がするけどネ。

曽根 昔は近かったでしょう。

大岩 今だって札幌とか近い処でやつてるんだけど集りは悪いね。

米沢 俺が行かないから、もうダメ。(笑)

大岩 チベットのばかり行ってるから。(笑)

曽根 俺もね、遠方には個人で行くべきだと思ふよ。親交会ってのは最大多数が行く

様な近間が賛成なんだ。だから今回の旅行も俺は大反対なんだ。

上田 でもね、アンケートを取って、その中の最大多数を採ってるのね。人数制限もあるしサ、あれはあれで仕方ないんだな。大岩 全員参加がいいってのは百も承知なんだ。それで行楽会——あれは出席いいんだよねえ。

原田 会員の年令層の幅が広がって来たんじゃない、だから旅行にしてもネ。

大岩 年寄がなかなかネ……元氣だもの。

東 生き永らえて申し訳ない。(笑)

原田 早まられても困るよ、会員少なくなるんだから。(笑)

佐藤 もう九人しかいないんだ。

曽根 東先生、オレが手本にしてるのは、あんただけだ。

東 うん？何を手本にするって？

曽根 現役でやってサ、外でも毎晩飲むんだからエライ。米沢さんは米沢さん、だけれど俺は東さんを手本にしとるんだ。

原田 曽根さんだって歩いてるよ。

曽根 いや、歌ももうやめたしナ。

表裏別体

◇◇ 親交会の金、死んだら女房のところに行くんでしよう。あれは不満だなあ。

曽根 四十代は貰ったほうがいい。六十代七十代は貰わないほうがいい。三十、四十で死んだら子弟が路頭に迷うでしょう。だから幾らでもやったらいいけどさ、七十過ぎたら寧ろいいと思うな。

佐藤 七十と云ったら俺七十だよ。

曽根 だから先生はどんどん使った方がいいの。金ほしいからオレやめた、って言う人だって出て来るの。

東 俺は金ほしいよ。

上田 最後に決めましたよネ、満七十以上加入年数二十年以上の特別扱い。積立金の免除とか返還。

大岩 金を全部戻して新たに始めてもいいんじゃないか、という話もあるんだ、ウン。

曽根 うーん、いろいろあるんだナ。今度

は長寿金とか祝金なんかも作ればいいんだ。上田 これ私が言うのもアレだけど、同じ医師会の中でも一つの裏組織があるのはどうか、もうそろそろ限界じゃないか、と言う人も確かにあるの。

(うん、うん、そりやあるな)

もし続けて行くならば、どうやって会員のメリットを保ち、正しく存続して行くのにはどうしたらいいか、此の事はこれからどうしても考えなきゃならない問題なの。

原田 入りたい人が入ってりゃいいんじゃないかな。

佐藤 あんたの考えと俺は同じだよ。

大岩 全く個人の意志、個人の資格で入る会だって事が納得されていない処があるナ。入会の時よく説明しないと駄目だな。

◇◇ 入会しても全然来ない先生もいれば、あんな遊びの会に入りたくないのに入った、と言う人もいますよ。

曽根 文字通り親しく交わる会なんだから

そう思わない人は仕方ない。いいんでない。米沢 強制的ではないんだ。

原田 医師会の有志による会だから。それは内規にうたってあるもの。

大岩 俺にしてみればメリットなんて大した事ではないけど、現代はそれが重要なんだよナ。

◇◇ 医師会と一緒にして考えてますね。

曽根 表裏一体ではなく表裏別体。(笑)

◇◇ 昔は一旦危機があった時は出すんだと、それが現在は楽しく遊ぶ会なんだと、

という事で僕は此処迄つっぱってるの。

原田 貯金団体として考えたら、こんな馬鹿らしい団体はないよナ。利子は全部飲み食いされちゃうんだから。

東 医師会は公的なもんでしょう。親交会

は私的なものさ。例えば行事やるとする、忘年会でもネ。医師会でちよっぴりでも出せるかという……だから医師会のバックとしての力は大きい、と私は思っている。

曾根 俺もそう思う。

米沢 時代は今、そうなって来ていない。

原田 親交会の組織率が大きくなって来たから医師会をバックアップ出来るのさ。

米沢 そのために医師会長と親交会長が一本になったんだ。

佐藤 斉藤会長はその点非常にベトーンンしていたな。二つでなく一本化を。

東 俺はバックアップの力は大きいと思う。

米沢 まあ、時代の流れもあるから、あんまり老いの繰り言を言わないこと。(笑)

◇◇ 米沢先生、さつき約束したオフレコの話、してくれませんか。

米沢 アレ、しゃべったんでないか？

原田 もう少し飲んだら出て来るんでない。

米沢 どつかで言った。しゃべったら俺は忘れてしまうんだ。(笑)

曾根 しかし、ああいった良い時代はもう来ないよ。

(来ない、来ない)

大岩 あの頃の三千万は随分力があつたけど、今の金は力ないよ。

曾根 だから先生方がいい時代に遊んだの。(そうさ、そうさ) 昔みたいに芸者なんか連れてつたら大変だ、なんぼかかるか。

上田 それよりも新聞にやられるよ。

曾根 医師会長が、つてか。(笑)

「波久鳥」について

◇◇ 親交会誌「波久鳥」の創刊号が上田

先生の手によって誕生してから、早いもので今年は八号になります。内容その他いかがでしょう、ご意見やら、ご希望やら。

原田 もう八号にもなるんだから、そろそろ思い出集というのは止めてサ、何か進歩的なものにしたら。

米沢 そうだな、悪口でもナ。医師会の姿はこれでいいのか、なんてナ。(笑)

俺、書いてもいいんだけど書く機会を与えてくれないんだもの。(笑)

上田 いや、二回書いてるでしょう。

◇◇ なにも八号ぐらいで、急がなくてもあと数年も経てば自由に書けるようになりますよ。

上田 「波久鳥」を創ったのは矢張り長田先生なんですよ。向うへ行かれてから……

あと十年二十年たつて親交会という組織がこんなにも働いたんだ、やったんだ、という記録が残っていないのは非常に惜しい、とすばらしい、すごい文を書いて来られたの。会誌名も先生の「白鳥」を頂いたわけ。

◇◇ 実は長田先生からお手紙を頂いてるんですけど、これ、会長の責任を以て読んでもらいましょうや。

原田 正式な達筆だから読めるさ。

上田 「はいけい きょうは つゆはれずなつを おもわせような……」

(二、三ヶ処 え？なにになに？あ、そうかさすがに見事読み終えて)

……大久保洋平様。アレ？これ大久保先生が読んだつたんだよ。

大久保 先生、カナ振っておいて。(笑) 稲葉先生のお便り、これは私読みます。

「……お贈りいただいた頃に僅かですが御送金申しました(医師会長宛) 届いているでしょうね、お返事がなかったので」

上田 あれ？俺知らないもの。

米沢 お、こりや、横領だ。(笑)

◇◇ いづれ調査しまして(笑) いえ、確かに頂いてるんですが、会長がお返事を書くものとばかり思っていて。ちゃんと検印もあります。

曾根 盲判だ。

◇◇ 十年間には全会員が文章でもよし、どんな形でもいいから会誌に顔を出してもらう事が理想だと思ってるんですがネ。

曾根 気兼ねしないでさ、直接家に行つて先生お願いします、つて言えば――

上田 あんた、書くかい？

曾根 俺は書かない。(笑)

◇◇ 今夜は大いに語っていただきまして有難うございました。用意しましたお酒も料理も出尽したところで終了とさせていただきます。(拍手)

臨床の窓

心臓外科における「心筋保護法」の役割と、その基礎的研究・臨床応用の過去・現在・未来について

川上 敏晃

心筋保護法とは

心臓手術で使用される人工心肺装置による体外循環法は、手術対象臓器の心臓を含む全身のサポートを目的としたものであるが、心筋保護法は、とくに、心臓に対する保護手段である。Myocardial protection の日本語訳であり、この10年来、我が国の心臓外科領域でも重要な補助手段として注目され、関連学会での研究発表が活発におこなわれてきた。心臓手術の術後成績を左右する重要因子の一つに、心筋保護法の優劣があげられており、その進歩発展が最近の心臓外科の手術適応の拡大と手術成績の向上に大きく貢献していると云われている。

心臓外科においては、術前・術中・術後を通じて循環動態・代謝など各方面からの細心かつ適切な管理により心筋の器質的・機能的障害を出来るかぎり抑制すると共に、出来うればより改善せしめうるべく努める必要がある。これが本来の心筋保護である。ここで話題にした心筋保護法は狭義のもので、主として手術中の

補助手段としての術中心筋保護法に限定したい。

心臓の手術では対象臓器となる心臓が全身循環の原動力となるポンプであるために、手術中はその代行を人為的な方法でおこなうことが必要であり体外循環法が応用される。心筋への冠循環も特殊な状況下でないかぎり、非生理的ではあるが維持されており一定許容時間内は心筋保護も十分におこなわれると考えられる。しかし、最近の心臓外科においては、主として手術手技の容易化と確実正確な実施のため冠循環を人為的に中断し心筋を虚血状態として心停止の状態とすることが一般的となっている。これは、既して手術野が狭ま、かつ深い場所でのリケートな切開・切除・縫合などをおこなうことの多い心臓手術では理想的な無血静止術野が得られるので誠に好都合と云える。さて、常温(体温37度)でも15分前後の冠血流の中断は心筋傷害も軽微で重大な心機能障害を惹起することは少ないと云われているが、病的心臓では心筋肥大とか心筋傷害が既に存在していることが多いので、正常のものに較べて虚血に耐える許容時間は短くなる。そこで、手術手技からみて望ましい心停止状態を、手術に必要とする十分な時間、つまり2時間位は安全に維持する方法を開発し臨床手技として確立する必要があった。これが心筋保護法の研究の端緒である。多くの研究が集積された成果が、現在の術中心筋保護法の主流となっている方法として全世界に普及応用されているが、なお現在の方法にも未解決の問題があり今後の研究の発展に多くの期待がもたれている。

術中心筋保護法研究と応用の経過(過去)

体外循環法で心臓手術をおこなう時の心筋保護法としては人工心肺装置に熱交換器をつけ、体外循環に支障のない程度に回路血

液を冷却し（通常30度C以下20度以上）全身を冷却し中等度低体温とする方法がもっとも基本となる。この方法を上手におこなうと、単純に大動脈を遮断してもその時の心筋の温度が低下しておればその温度が低い程、虚血の安全許容時間も長くなり、臨時的にも30分前後の虚血心停止手術が安全とされた。この方法で手術のもっとも難かしいところを手早く終らせることで手術もかなり容易化されることになったのは事実である。ただ、その安全許容時間が十分でないのも、更に心臓のみを選択的に冷却し心筋温を20度以下に低下する方法が20年前にシヤムウェイにより開発臨床応用され1時間程度の安全性が確立され、これが全世界に普及し心臓外科成績も飛躍的に向上することになった。この心臓局所冷却法は体外循環における生体循環（とくに微小循環）で問題を生じない直腸温30度C程度の低体温に併用されて、大動脈遮断で心筋を虚血とし、心嚢内に氷水又はアイスシユラウシユを充満し心臓を更に冷却するという簡単な方法である。この方法の問題は、単に冷却で心筋代謝を下げ心筋の虚血耐容時間を延長せしめるものであるが、肥大大心筋などで心臓内外層で均一な冷却が出来ないこと、露出部分の温度上昇がみられること、頻回に氷を追加しなければならぬこと、時に心内操作の支障になることなどで60分以上の手術では心筋保護効果は十分でないことが多いと考えられる点である。一方、術中冠循環を体外循環法で維持する方法はもっとも古典的なものであり、とくに大動脈弁手術では当初から人為的に冠灌流をおこなう装置が工夫され応用されていたが十分な心筋保護が得られないばかりか、手術操作が妨害されるなどの問題が多く、既に過去のものとなり現在は使用されていない。

大動脈遮断を必要としない手術では心筋保護の面では問題はなにも、心拍動の存在・心筋トーン・術野への血液還流などで手術が大変困難になることが多かった。したがって、心拍動に

対して電氣的誘発細胞法を応用し静止法としたこともあったが、心筋灌流に問題を生じることが明らかになって以来、これも使用されなくなった。

心筋保護法の現況（現在）

過去におこなわれてきた種々の方法のうち冠灌流法・局所冷却法および回路血冷却による低体温法について工夫改良がおこなわれ、これらを適宜併用すると共に、冠灌流に使用する特殊組成の液（Cardioplegic solution）も開発され、すなわち、所謂 Cardiosesal 法が現在の心筋保護法の主流となってきた。この方法によれば、心臓は完全停止状態となり良好な無血術野で手術をおこなうことが可能となり、しかもその時間的安全限度は2時間あるいはそれ以上となった。2時間前後の時間的余裕は大いなる心臓手術の施行には十分であり、このため、以前には手術適応から除外されていた重症かつ複雑な心奇型に対しても手術治療が可能となり新しい手術手技が開発され心臓外科の進歩発展に多大の貢献をするようになった。

具体的に現在もっとも普通におこなわれている心筋保護法を紹介すると次の通りである。基本的に直腸温で30度C程度の中等度の低体温外循環とする。大動脈を遮断しヤング液（高K濃度の心停止液）あるいは、初めから心筋保護液（ $K^{+}25 \sim 30 \text{ mEq/l}$ ）濃度の電解質溶液あるいは、同濃度のK含有の稀釈血液）を大動脈基部に加圧注入し心拍動を停止し心臓を弛緩性心停止状態とする。この時使用する注入液はあらかじめ5度C前後に冷却したものである。同時に心嚢内にアイスシユラウシユを満し局所冷却で心臓を冷却する方法を併用することが多い。つまり心臓を完全な静止状態とし、更に20度C以下に心筋を冷却することになる。心筋代謝

は著るしく低下した状態となる。この方法では、心停止中心筋温を可及的に低く維持すること、心筋の電氣的活動性を有効に抑制し、さらに心筋代謝産物を冠灌流あるいは心筋灌流で間欠的に排除すると共に、低温下で進行する心筋代謝に対処し適度な酸素と代謝エネルギーを供給し心筋のATPの消耗を抑制するのが目標となる。その目標達成のため15分ないし30分毎に酸素加された心筋保護液（ α -枯抗剤配合のものも検討されている）を体重1kg当り5ml程度を反復注入してゆく。症例により心筋保護液の灌流経路も種々工夫されているが、私の工夫した逆行性冠静脈灌流法は大動脈の切開をおこなうものではとくに有用な方法であり10年来の実験的・臨床的研究で学会報告をおこなってきた。これは手技的にも選択的冠動脈灌流法よりも簡易であり、その保護効果にも問題はない。大動脈を切開しない例での追加灌流は大動脈基部に穿刺留置したカニューレから非選択的に加圧注入することでおこなわれている。学会における本法に関した議論の焦点は心筋保護液の組成の問題にあり、将来、より保護効果のすぐれた液の開発が検討されている。

心筋保護法の発展と応用（未来）

現在の心筋保護法の質的改良により、近い将来、心臓外科医が望みうる最良・最高の手術条件が確立し、その外科治療成績の向上に一段と貢献度を増すことは十分期待出来る。

体外循環法におけるポンプと人工肺の進歩によりもたらされた長時間バイパスの安全性と共に、十分余裕のある手術時間が提供され、外科医は単に手術にのみ専念しうることが可能となるであろう。そこで、心筋保護法の研究は単に心臓手術の補助手段としよりもは将来は、その成果を心臓移植のための長時間心臓保存法

の開発に向けて応用したいと考えている。心臓移植の臨床での社会的・道義的問題、さらには脳死判定法などその実施をめぐる諸問題の解決は未だ遠い感が強い。

しかし、仮にこれらの難題に解決がみられたとしても、最大の難関がもう一つ存在している。それは、移植心臓の入手の問題に他ならない。この問題の解決のためには移植心臓の入手範囲を拡大し日本全国あるいは外国からも求めうる体制と長時間保存を可能とする心臓保存法の確立が必要となる。私は北大第2外科での研究生活の中で、この問題をテーマとし研究を続けてきたが1972年、胸外科25巻9号に発表した72時間保存の研究をはじめ多くの研究発表で、少なくとも24時間以上の心臓保存は可能性があることを述べて来た。室蘭太平洋病院に赴任してから、厚生省班研究の一員として3年間の実験的研究を担当し、今年がその最終年度になった。この研究成果として、24時間心臓保存で極めて良好な機能を有する心臓をうることが出来、これを日本でもっとも離れた鹿児島大学に搬送し平明教授に依頼し同所移植をおこなう生存犬を得ることに成功した。その詳細は、本年度中に学会発表を予定しているが、24時間の心臓保存はもはや現実のものとなり、これまで6時間を限度としていた段階から考えると飛躍的な進歩であると喜んでいい。現在の保存法には未だ改良工夫の余地を残しているので、目標は48時間以上にしており、恐らく可能であろうと思っている。2日ないし3日の心臓保存の実現を夢みて、今後共、努力を続けたいと考えている。

医史

新聞記事から

上田 智夫

室蘭市医師会史（会史と略す）の刊行から十五年たち、この間入手し得た情報から記載の一部を訂正せねばと思っていたが、医事にかたよる為適当な発表の場がなかったたので、本紙に投稿させていた。資料の大部分は、室蘭地方史研究会会員で俱知安労働基準監督署勤務の葛西一夫氏が、マイクログフィルムより収録した、北海道毎日新聞（明治三十四年より北海タイムス）の紙面である。

今回は室蘭病院（のち公立室蘭病院、現市立室蘭総合病院）を中心に検討してみる。

○明治二十一年七月三十一日

辞令 室蘭病院長島田操氏は願に依りて本職を解かる。齊藤専三氏は室蘭病院長を命ぜられ月俸金三十五円を給与さる（七月二十七日分）

○明治二十二年四月二日

増俸 室蘭病院院長齊藤専三氏は、昨日より月俸四十円を給与せらる。

この二つの新聞記事から、第二代室蘭病院院長島田操は、明治二十一年七月には退職し、八月からは齊藤専蔵（専三）が三代院長となり、従来不明であった月俸が三十五円、翌二十二年四月からは四十円に昇給している。

従来、昭和十六年発行の「室蘭市史」（以下市史と略す）では、齊藤の就任は明治二十二年四月一日、板沢庄五郎著「医業二十年の回顧」（回顧と略）及び市立室蘭総合病院「百年の歩み」（百年と略）では共に就任が明治十九年七月となっているので、すべ

て誤りであると考えられる。

なお、齊藤は明治二十四年四月には退職し幕西町に私立病院を開く。「会史」に紹介した如く、従来最初の開業医は本多芳太郎と考えられていたが、その広告がみつかった。

○明治四十一年一月十日

開院広告

内科小児科	院長	本多勝安
産科婦人科	副院長	
医学得業士	本多芳太郎	

室蘭 本多医院

これからみると本多医院の開業は大分あとで、一時滞在と称した渡り医師を除くと、正規の室蘭開業医第一号は齊藤専蔵と考えられる。

○明治二十五年三月十七日

医員辞令 矢野代四郎氏は、室蘭病院長（月俸四十五円）を命ぜられたり。

○明治二十五年三月二十二日

医師の雇入 室蘭は近來人口増加し、土地繁昌に赴きたるに付、該地の有力家等は移民に安堵を得せしむる為、良医を迎えんと協議中なりしが、恰も好し紋鰐病院院長森時定氏は、満期にて退職するとの風説ありたれば、同氏を迎えんものと郡長え謀りたるも、森氏は月給高きにより先に申込ありたる某医を雇う事に決せりと。（一部新仮名づかいに訂正。以下同じ）

この二つの記事を並べてみると、どうやら財政面ではかりにかけて、矢野氏を選んだ様子が浮かんでくる。ちなみに、「市史」は矢野大四郎として、明治二十四年四月就任としているが、この時機には或いは平の医員として就任していたのであろうか。

「回顧」には氏名がのっていない。

明治二十六年から、室蘭公立病院を札幌の土屋轍氏に受負わせしたのは「会史」に述べたところだが、いろいろ不協和音が出た様である。

○明治二十八年一月十三日

室蘭公立病院 同病院は先年まで年々二千三十余円の支出予算にて、公立とし継続し来りしも、色々入組たる事情ありとかにて、一昨年末札幌区の土屋轍氏をして受負はしむる事となり、町費よりは金五百円を補助せしが、院長及薬剤師と会計との間に葛藤を生じ調和せざるより、同港内の人々は大いに困却し且不便を感じ、不平至る処に蓬起し若し今後の処にて、かかる弊害を除き以て病者に満足を与えざるにおいては、受負を解くの外なしと各惣代人有力者は主唱し居る由にて、来る二十二日頃に開く各町総代会に於て決議の上は、郡長は断乎たる処分に出る事ならんという。

○明治二十八年二月八日

室蘭公立病院 室蘭公立病院の不整理に就てはかねて記載したりしが、本年三月土屋轍氏が受負期間あけなるを以て、港民の之に対する意向は、一は土屋氏の受負を解き更に完全なる公立と為さんとするに在るが如くなりしに、去月十八九日頃土屋氏は室蘭郡吏と協議の末、受負金額を更に八百円にのぼせん事を申し出たるに、右無効となり従前の通り五百円にて受負うことに決定し、其後土屋氏は従前の病院医に解雇の沙汰を出し、更に新医員を差向けたりと。元来公立病院医員は、官命を以て其職を執る者なるに、たとえ受負者にもせよ土屋轍氏なる一個人より解雇せらるゝの理なしとて、医員等は土屋氏が解雇の命に服せず、未だに執務し居るより、各総代人は去る三回臨時総代会を開き協議を為したりと。

○明治二十八年三月二日

室蘭公立病院 先に本紙に於て其不整理をならせし室蘭公立病院は、愈々本年三月限り土屋轍氏の受負を解き、完全なる公立病院となる事に決定せる由にて、其場合には病院費支出の点に於て幾分か前受負病院の当時と差異を生じ、随つて賦課額の超過を見るに至るべきも、病院たるの実に於て大いに満足を得ることあるべし。当分のうち役員は、四十円の院長一名、二十五円の医員一名、十円の薬剤員一名、七円の事務員一名にて執務する筈なりと。

財政上の理由で土屋氏に病院を受負わせ増額を拒否する郡側も、一方的に医員の解雇を申し渡す土屋氏の側にも、それぞれ問題があったのであろう。

○明治二十八年三月二十六日

室蘭公立病院 同病院は本月限り土屋轍氏の請負満期につき、来る四月より従来同院医員として篤実懇切の聞こえある、小野寺義郷氏院長に推さるゝならんといえり。

○明治二十八年四月五日

室蘭公立病院 札幌の土屋轍氏受負の室蘭公立病院は、客月三十一日限りにて、四月一日以降右受負を継続せしめざることを、なりしかば、去る一日土屋出張医員、郡吏立会いの上事務を引き継ぎたる由なるが、引継上別状なく翌二日より小野寺義郷氏を院長とし、其他医員、薬剤員、看護夫に至るまで、悉く更迭して院務に服せりと。

「市史」に就任、退任時期不明として記載されている、中村常次郎（回顧では常太郎）「回顧」や「百年」に名前が見える中村元八郎などは、或は土屋氏の雇用した院長ではないのかと言う気がする。小野寺氏は明治二十九年五月まで在職している。

○明治二十九年十二月十五日

池亀院長の送別会 岩内公立病院副院長池亀祐藏氏は、此の程

室蘭公立病院長に聘せられたるに付、本月十日午後四時より同氏のため送別の宴を共同館に開かれ（中略）なお池上院長は翌十一日陸路室蘭へ赴任したりという。

小野寺院長をついだ池亀院長は、岩内病院副院長から転出して来たのだが、「回顧」及び「百年」では、明治二十九年十二月就任、「市史」では明治三十年十一月となっているが、前者が正しい。この後短期間、米川虎吉が病院長をつとめた事は会史に述べた。

○明治三十二年十一月二十五日

室蘭公立病院長 同病院長たりし米川医学士根室病院へ転任後、久しく欠員のまゝなりしが、今回医学士神林玄神氏就職に決し、去る十九日秋岡樓において盛大なる歓迎会を催したり。

「市史」の明治三十一年十月就任は誤りである。また、この様にして得た院長に対しても苦情を言いつつののである。

○明治三十三年四月二十六日

室蘭病院の紛擾虚報 同病院過般紛擾ありて院長はじめ医員一同袂をはらつて辞職せんとし、為に入院患者の治療等甚だ冷淡なりとの風説ありしが、右は全く或る二三者が私利の為遊廓連と通じ、遊廓連は検徴に際して少なからざる利益を得ん為、開業医某氏を院長に据えんとする魂胆にして、其一派は若し其者を院長にすること出来ざれば、検徴のみにても托さんとの意なりとさる人は物語れり。

○明治三十三年五月三十一日

鉄道巡り 室蘭病院長神林玄眞は医科大学卒業生なり、年令三十八九、月俸二百円なれども、二千円の薬価収入予算に対し半額すら覚束なく、病人多くは開業医に赴く、排斥の声甚だ高し。

○明治三十三年七月二十二日

室蘭通信（二十日発） 当地病院の不整理は今更の事にあらざ

れども、院長神林学士は町民との交際兎角円滑を欠き、患者に接する親切ならざる傾きあり、加え就職後半年以上を経るも決算の報告をなさざる等にて、それやこれや町民の忌避する所となり居れり。尤も同氏は医学士として技倆の点に至りては人々皆感服し居る処ながら、昨年度の如きは千二百余円の不足を生じ、あまつさえ同氏就職以来は、一日の患者の数を減じ、あたらず院長も最早在職の見込なき場合となり、殆んど四面楚歌のうちに在るもの、如し、他に適當の医士もあらば一日も早く之を迎えんとは、港民一般の望む処なり。

神林医学士は、神林玄進が正しい。

○明治三十六年四月十二日

室蘭管見録 室蘭公立病院 は去る三十年室蘭小学校に引続き、蓼原郡長の企画により今の常盤町に改築し、移転と共に現根室病院長たりし米川医学士院長として赴任し約一年にして根室へ赴き、後任には医学士神林玄進氏来任是亦一年許にて辞任帰国したり。然るに其後任には医学士を聘せず、得業士池亀祐藏氏を態々福山より招聘したりしが、本年度よりは愈々医学士を院長に聘することとなりたるを以て、池亀氏は去月三十一日依願退職となり、在職中の慰勞として金二百円を贈与せり、又同院薬局助手三宅安吉氏は精勤の廉により月俸三分の二の特別賞与を受けた。

○明治三十六年四月二十三日

室蘭片信 公立室蘭病院長の後任には、根室病院長たりし医学士米川虎吉氏赴任することに決定し、同氏は本月下旬根室出発来月初旬着蘭する筈なりという。

前院長たりし池亀祐藏氏は、最上谷慶次郎、秋場全勇二氏の幹施により、愈々来月一日より室蘭停車場前、安東辯護士出張所跡にて開業する由にて、昨今専ら準備中なり。

氏 名	出典	就 任	退 任	摘 要
① 赤 城 信 一	板沢 市史 百年 上田	M. 7. 1. — M. 6. ? M. 5. 9. — M. 6. —. —	M. 17. —. — M. 22. —. — M. 17. —. — M. 20. —. —	明治6年より固 定と考えられる。
② 島 田 操	板沢 市史 百年 上田	M. 17. —. — — M. 17. —. — M. 20. 4. —	? — ? M. 21. 7. 31	市史記載なし
③ 斎 藤 専 蔵	板沢 市史 百年 上田	M. 19. 7. — M. 22. 4. 1 M. 19. 7. — M. 21. 8. 1	? M. 24. 4. — M. 24. —. — M. 24. 4. 30	
④ 矢 野 大 四 郎	板沢 市史 百年 上田	— M. 24. 4. 中 ? M. 25. 3. 17	— M. 26. 10. — ? ?	板沢記載なし
⑤ 中 村 常次郎				共に不明。 土屋氏雇用の院 長か？
⑥ 中 村 元八郎				
⑦ 小野寺 義 郷	板沢 市史 百年 上田	? M. 28. 4. 4 M. 28. —. — M. 28. 4. —	? M. 29. 5. 25 M. 29. —. — M. 29. 5. —	
⑧ 池 亀 祐 蔵	板沢 市史 百年 上田	M. 29. 12. 25 M. 30. 11. 5 M. 29. 12. — M. 29. 12. —	M. 31. 9. 19 M. 31. 9. — M. 31. 9. — M. 31. 9. —	
				川 西 初太郎 院長代理
⑨ 米 川 虎 吉	板沢 市史 百年 上田	M. 32. 1. 19 — M. 32. 1. — M. 32. 1. 19	M. 32. 9. 10 — M. 32. 9. — M. 32. 9. 10	市史記載なし
⑩ 神 林 玄 進	板沢 市史 百年 上田	M. 32. 10. — M. 31. 10. — M. 32. 10. — M. 32. 11. —	M. 33. 9. — M. 33. 12. 30 M. 33. 9. — M. 33. 12. 30	
⑪ 池 亀 祐 蔵	板沢 市史 百年 上田	M. 35. 4. 1 M. 35. 10. — M. 33. 12. — M. 35. 10. —	M. 36. 3. — M. 36. 3. 31 M. 36. 3. — M. 36. 3. 31	板沢、市史、 M. 33. 12. 30 より副院長、 35年より院長
⑫ 米 川 虎 吉	板沢 市史 百年 上田	M. 36. 5. — M. 36. 5. 8 M. 36. 5. — M. 36. 5. 8	M. 41. 5. 25 M. 41. 5. 25 M. 41. 5. — M. 41. 5. 25	

結局、池亀院長は明治二十九年に一度岩内から招かれ、短期間で米川院長に代り、米川氏は半年くらいで根室に転出、この間に神林玄進氏が入って、その後福山に落着いていた池亀院長を再度招聘し、今度は医学得業士で医学士でないとして再び解雇、前回解雇した米川氏を再び呼び戻している。院長の首のすげ代えを、

いとも安易に行なっている。
以上あまり面白くもない事項を書き連ねたが、最後に一覧表をつけて市立病院年表の御参考としたい。(追記 新しい室蘭市史の第四巻が発刊されたが、充分な検討ができないので、そのまの原稿とします)

13代以下については、各書記載どおり。
板沢＝板沢床五郎「医業二十年の回顧」
市史＝昭和16年「室蘭市史」
百年＝市立室蘭総合病院「百年の歩み」

音楽の散歩道

なつメロ考

― 音楽における前衛と復古 ―

安 斎 哲 郎

ここ数年来音楽談義を連載させて貰ったが、そろそろ蘊蓄も尽きかけたし、特別音楽好きでもない方には退屈だらうから、今回はお休みを戴こうかと思つてるところへ、編集子からのサジェスチョン、「いまなぜタンゴなのか、などはどうか」とのことで、標題のような雑学披露を思いついた次第。事実、昨今タンゴが昔日の人氣を復活しているそう。僕は知る人ぞ知るダンス音痴だが、貧乏書生時代の終戦直後、進駐軍相手のダンスバンドを組織してバイオリンで糊口を凌いだことがあるから、その頃のダンス音楽のことなら多少は知つてゐるし、「ジェラシー」や「キスオブファイヤ」のイントロのバイオリンで我ひと共に良い氣分を満喫した経験なら、今どきのバイオリン弾きの人後に落ちない。當時はフォックストロットやスローワルツが全盛で、タンゴは最も踊り方がむづかしいと言われ、何組かが得意げに踊るのを他のカップルは羨ましげに見物していたものだ。その後ルンバやジルバだ、ロックンロールだ、ゴーゴーだとダンス音楽も変遷を重ねて来る頃はダンスバンドから足を洗ったあとだから、僕にとっては別世界のことで、発言の資格はない。従つて、いまなぜタンゴなのかと言われても、タンゴの良さが再認識されたのでしょうとか答えようが無いのだが、ここでタンゴ談義を試してみても仕方がないから、少しく論旨を変えて、音楽における復古調とは何か、と開き直つてみることにしよう。したがって、カラオケでなつメ

ロを歌うのに何かの参考にもなるか、などの下心をもつてこの雑文を読まれても決して参考になぞなりはしないから、そういう方ははじめからお止めになった方がよいと、あらかじめ警告を差し上げておく。

クラシックの世界でも最近ではマーラーやブルックナーが大流行で、かつては客入りの点では絶望的といわれたこれらの（退屈極まる）長大な交響曲の演奏会が最近では間違ひなく満員になるのだ。そう。退屈極まる、というのは僕の感想ではなく、僕が夢中になつてこれらの大曲のレコードを漁つた若かりし頃の一般的评价がそうだったのである。

一体に音楽に限らずあらゆる他の芸術でも保守と革新の両極端の中を揺れ動くこと、政治などよりも余程顕著なものだ。いわばその両方向のヴェクトルの摩擦こそが進歩の原動力であつたことは、ルネッサンスの合言葉が「ギリシャに帰れ」であつたことを思い出して戴けばよい。ルネッサンスとは新生のことだが、新しい芽を出すためには種子を古代ギリシャの土に蒔く必要があつたのだ。ただし、美術、彫刻、建築、文学、演劇等はいざ知らず、音楽に関してはギリシャ時代は楽譜が無かつたから、復古はそう簡単には参らぬ。いきおいルネッサンス音楽はその精神はともかく、型式、技法などの点ではギリシャ音楽とは似ても似つかぬ姿であつた。これに続く十六世紀後半から十八世紀前半までの音楽がバロック音楽と呼ばれるものだが、第二次大戦後あたりから一時世界的にバロックブームがあつて、現在もその尾を引いていることご存知の通りである。僕自身、指揮者としての個人経歴はまづバロック音楽専門から出発した当時は、まだ日本ではバロックブームの嵐が吹き荒れない頃だったので、昭和三十年代半ばのイムジチ来日の頃から日本国中バロック音楽だらけになつた時代がある。もっとも、日本ではバロック音楽といつてもせいぜいヴ

イヴァルディの「四季」ばかりで、かなり底の浅いバロックブームであったことは否めない。ヨーロッパのバロックブームはもつと徹底したもので、最近では楽器もバロック時代の掘り出しもの、ないしはそのレプリカを使用しない限り、バロック専門と称するのはおこがましいと言われるような時代である。

さて、話が堅苦しくなるので、標題のなつメロに戻ろう。なつメロ：懐かしのメロディ：という現象自体が復古を意味しているわけだから、カラオケでなつメロを歌う先生方、各々の胸に手を当てて下されば自然とおわかりで、こんな大論文は不要となります。各々が流行の新譜ではなく、なつメロを歌われる時は、「若い者にはついて行けないから止むを得ず」なんていう気は毛頭なく、心から昔の歌が好きだからに違いない。それで宜しいのです。それ以外に「いまなぜタンゴなのか」の類の設問に対する解答などありよう筈もないではないか。但し、何故好きか、といわれると答は甚だ複雑になる。懐かしいから、昔は良かったから、青春の記念碑だから、今の歌より情緒があるから、等々、さまざま有るだろう。そう、その「情緒があるから」という答に復古の鍵があるというのが真実だろう。

実は、戦後のバロック音楽再評価の背景もこれと同じと言ってよい。十九世紀末から今世紀初頭にかけて、クラシック音楽の世界ではそれまでのロマン派音楽がワグナーに至って一つの極限に到達してしまったため、変革を目ざす作曲家達はロマン主義を超越しようと、涙ぐましい程の暗中摸索を繰返したことがある。ロマン主義というのは、それこそ情緒優先の芸術運動だから、その反動は一切の情緒を切り捨てて、純粹の音響そのものの美を探ろうという運動となり、伝統的な和声やリズムを否定して、目まぐるしい変拍子、不協和音の頻繁な使用などから遂には無調音楽、十二音音楽というものが出現した。これらを一括して前衛音楽と呼

ぶが、つまりは作曲家達が自己実現の手段として聴衆をモルモットにした実験音楽だから、聴衆の側からいずれは不満の声が上がるのは当然である。かくして、実験芸術に対する聴衆の不満がバロック復活という形をとって爆発したものと僕は見ている。何故バロックだったのか、の問いに対する答の中にはバロック音楽とポピュラー音楽との共通性というか、バロック音楽が当時の通俗音楽であった事実が隠されている。バロックとジャズとの共通性とは、たとえば編成が小さく、室内乐的であること、楽譜は骨組みだけで、演奏者の自由な即興性が重要視されること、指揮者の代りにチェンバロがジャズにおけるドラムと同じ機能をもっていること、バロック（奇怪な）という呼び名とは裏腹に、端正で均衡感覚充分な形式であること、などがある。

もう一つのバロックの魅力は聴く側の自由度の寛さという問題がある。気楽なBGMともなれば、シリアスな純音楽としても聴けるし、多少楽器演奏の心得のある人ならアマチュアでもさして躊躇せずに演奏に参加できる気易さがある。これは現代のポピュラー音楽でギターやキーボードが大して基礎の心得のない人にも演奏できるという点との共通性もある。現代のエレキギターやキーボード（シンセサイザー）ではその上に、エレクトロニクス技術であたかも自分が上手になったかのような錯覚をも楽しめるというおまけもついている。ただしバロック時代には音の色彩は現代よりずっと地味で、いわば墨絵の枯淡な味に似ているが、聴く側では却ってそれだけに自分の心中に色彩のイメージを限りなく拡げてゆくことが可能なのである。

だが、聴衆は移り気なものだ。現在のマラーやブルックナーの復活は、聴衆がもはやバロックにも飽きたことを物語っている。何故か。僕に言わせれば、バロック演奏家が専門化してしまつて、前述の古楽器ブームとなると、初めは物珍らしさから注目した聴

衆も、すぐに新鮮さを感じなくなってしまったからに他ならぬ。マラーやブルックナーと言えば、ワグナーの影響を最ももとに受けた後期ロマン派の代表選手のようなものだから、今の流行はまさに歴史は繰返すことわざそのものである。僕の予測を言わして貰えば、このブームは両三年で終るだろう。次に来るのは恐らくヤナーチェクとシェーンベルグ、そして多分少し遅れてバルトークではないかと当りをつけている。シェーンベルグは十二音音楽のハシリで、ヤナーチェクはその先駆者だが、この時代にはまだ純粹の実験音楽と呼ぶにはのびやかさが残っていた。ヤナーチェクなどは正規の音楽教育をロクに受けていない我流の作曲家であったことが却って幸いして、民俗的な、また自分流の伸びやかな旋律を歌うには敢えて既成の音楽理論の概念を踏みはずさなければならなかったという点が彼の魅力となったので、これを発展させ、理論化したシェーンベルグも音楽の叙情性を決して無視しなかった所が、その後の群小十二音亡者と違う点であるのだ。僕にはポピュラーの世界を語る資格が全くないのだが、たとえばビートルズならついて行けるが最近のパンクロックだかなんだか知らないがただただ絶叫するばかりの、耳を聳る大音響で恍惚感を満喫するなどという方は、まず失礼ながら大半が中年・熟年の本会会員にはあまりおられまいし、マドンナとやら言う下着美人に多少の好奇心はありでも、武道館の前で徹夜する方などは間違ってもおられまいとは思うのだ。僕としては、あれをしも音楽と呼ぶことに全くもって不満なのだ。たとえば、大音響だけがあつて「マ」というものがない。エイトビートだか何か知らぬが単純な二拍子系のリズムのみ延々と続いて、起承転結も何もない。あるのは徹頭徹尾大音響と絶叫の渦だけ。疲れます。あれに熱狂する人は多分あの単調なリズムに浮かれていますうちに脳内エンケファリンが分泌増加を来すのかも知れない。出来ることなら、ロックコンサートに集まるヤングを捕えて、演奏会の

前後の脳内エンケファリン量の測定をしてみたいなどと考えることもある。それは兎も角、あれは音楽じゃなくて、いわば画面一杯に極彩色の絵具を無意味に塗りたくってタブローだと称しているニセ絵描きの作品の羅列だと思えない。だが、まあロックに夢中になる人があつても別に僕が憤慨する必要などないので、ただあれが音楽だなどと思う人さえいなければよいのだ。趣味が音楽だなどと自己紹介すると、「まあ、お年に似合わず」などとんだ誤解をする慌て者がいるから僕の腹が立つだけなのだから。僕として近頃心配なのは、次の世代があの高音響とウォークマンのお蔭で一億総難聴になどならなければよいが、ということだけだ。

ただ、これだけは信じたい。音楽というものは、元来もつと高尚なものであつて欲しい。右の脳だけでなく、まして脳幹どまりの植物的な原始感覚でなく、左右の脳新皮質から大脳辺縁系、そして間脳から脳幹までを網羅してまさに全身全霊で感応する芸術なのだ。たしかに人間以外の動物にも音楽が「わかる」のだそう、牛舎にBGMを流すと乳の出がよいのだそうだが、あれは牛がモツアルトを理解したり愛好したりするのではなく、多分間脳レベルか、たかだか辺縁系レベルで反応するのだろう。それでも絶叫型の高音響のBGMなら牛でさえ恐慌に陥って乳の出も止ってしまうのではないかしら。

なつメロ考の筈がロック罵倒になつてしまつたが、はじめに戻ると、我々がなつメロに求めるものはやはり叙情性、情緒で、言いかえれば人間らしい歌の原点がここにあるからだ、とこの頃しきりに考える。編集子から与えられた「今なぜタンゴなのか」という命題に対する答だつて、それ以外には無いではありませんか。昼間の仕事のあとで、寛いでグラス片手に歯切れのよいタンゴでも聴いてごらんさい。手回しの蓄音器にSPなんていうのも良いが、CDでもまあ構わない。人生が豊かになるではありませんか。

大正つ子物語―

「時の点鬼簿」から

加藤 治良

ケーソン

その日は早朝から入道雲が輝いていた。特別でかいやつは、二瘤駱駝そっくりの有珠岳の上空に、真昼近くになってもまだ伸びつづけ膨らみつづけていた。

防波堤の上や坊主山の頂上に陣取った人数もだいぶ増えたようだ。船入瀬の方向からもぐり込んだじろう達の仲間、引き上げられた廻船の間に体を寄せ合って、その時の始まるのをわくわくしながら待っていた。

コンクリートの巨大な立方体がすぐ目の前にそびえ立っている。学校の屋内運動場の屋根よりも高く、後ろの坊主山の崖より数倍も固く見える灰白色の光を、あたり一面に反射させている。

舟虫が二、三匹船べりの隙間から時々顔をのぞかせて、外の気配をうかがっているようだ。

築港の第二期工事というのが始つて祝津の町は活気づいていた。ドンガイの葉が繁る埋立の原をトロッコが走り、採石を積ん

んだ馬車や貨物自動車が街道を往来した。

鍋島山の麓の石切場でも十人以上のおやじさん達が並んで、賑やかに、コバルトがかった石を小さく砕いていた。日に五、六回は小ハッパの音が聞こえた。

赤防波堤が延長されるのだ。

それらの色々な音が今朝はびたり途絶えて、最初のケーソン進水の日が今日なのだ。

「まだだべかなあ」

待ちくたびれた木村のヨシの額から汗が吹き出ている。その声がきっかけになったかの様に、ケーソンの上で小さく動いていた人影が消えた。滑り台木の周囲に何人かが残る。笛が鳴る。ひとしきり、わらわらと叫び交す声が静まって……もう一度笛が長くひびいて、ピッ！

「おっ、動いたぞ」

中江のトシが伸び上がった。

真四角の巨大なコンクリートの塊りは、ゆっくりと滑りはじめた。スピードが増す。笛の音と人の声とが交錯する中をケーソンは轟然と海中に分け入った。

物凄い飛沫だ。歓声が舞い上がり、拍手が湧き起こった。

興奮と感動で、じろう達は海際に向って走り出した。

「こらっ、お前達。そんな所に居やがつて」

作業服のおやじが怒鳴った。

聞こえない振りをして右左と船の間を駆け抜ける。五十米ほど先の海面に三分の一の高さを残してケーソンは止まった。波がおさまるのを待って曳船のぼんぼん蒸気と磯舟が二そう近づいて行く。少年倶楽部で見た南極の氷山みたいだな、とじろうは思った。

「坊主山に上ってみるべや」

木村のヨシはもうかけ出している。

「オレ駄目だ。父ちゃんにグリス持つて来いって言われたんだ」

中江のトシは鍛冶屋の三男坊だ。滑り台に塗ってある油は津軽飴を溶かしたみたい。黄土色でどろっとしている。一度ついたら普通の石鹸では簡単にとれない。

「ボルトの締めに使うのかな。焼き、にかもしんねえな」

ブリキ屋の息子、笠原のテツちゃんは六年生で色んなことを知っている。

五人は一列になって築港事務所の裏手から細い崖道を登った。斜めに一度折り返すだけで、すぐ頂上の広い草地になる。あ、カナチヨ口だ。踏んづけた足の下には尻尾だけが残った。

「ほら、ケーソン動いてる。なして動くんだ、あんなに重くて、でっかいのに」

野田のサブがテツちゃんの顔を見上げる。
小さな曳船に引かれて、あのコンクリートの氷山が少しづつだが、とにかく動いているのだ。

「ケーソンは箱だから中は空っぽなんだ。海の中だと軽くなるんだ。陽があるうちに赤燈台のとこ迄行ってるさ」

何でも知っているテツちゃんだ。

大黒島の灯台が夏の真昼陽に白く輝いている。有珠岳上空の巨人雲も大きく育って輝いている。

防波堤の人達は外海側に小さく並んで、何事も起こらなかった様子で釣竿を垂れていた。

気がつくとも木村のヨシの姿が見えない。

「おい、ヨシ」

「どこにいるんだ、ヨシ」

口々に呼んでも返事がない。変だな、帰ったのかな。

おい、ここだ……ヨシの声が細く聞こえてきた。それがなんと、頂上の草むらが海に向かって落ち込んで行く、その斜面からなのだ。

顔が現われ、背中が這い上がってくる。

左手に握っているのは山百合の黄色い花だった。

「危ないベヤ、落ちたらどうすんだ。バカ」

木村のヨシは小粒で人一倍身が軽い。そのことは皆認めている。だが、テツちゃんは本気で怒った。

「女みたいにな、何だ、そんな花。下まで降りなくたって何処でも咲いてるベヤ」

子供たちが山百合と呼んでいる黄色いその花の本当の名前は、エゾカンゾウだよ、といつだったか月形先生が教えてくれた。

ヨシが手にしている三本の茎は普通のよりも短く、花の色も明るく奇麗で、すこしも傷んでいなかった。

「ジョンにやろうと思ったんだ。海さ流してやって……」

「そうか」

テツちゃんは、そのあと何も言わなかった。

四日前、石運びのトロッコに頭をはねられてジョンが死んだ。ヨシの家の犬には違いなかったがじろう達仲間の一人だった。茶毛の雑種で耳も尻尾も垂れ、瞳まで茶色に見えた。人の好いジョンは六才ぐらいにはなっていたかもしれない。じろうの店のあんちゃん達とも仲良しだったから、配達の自転車の後を追いかけて走っているのをよく見かけた。

埋立の原っぱで、ドンガイの繁みから飛び出したところに運悪くトロッコが走って来て、擦り傷ひとつ無いのにそれっきりだ

ったそうさ。じろう達が砂浜で泳いでいる間の出来事だった。

古い帆布で包まれたジョンは防波堤の中切れの端から降ろされ、夕映えいっぱいの水の中に消えて行った。

あの日からまだ三日しか経っていない。

「あの雲、ジョンに似てないか」

守島のヒロが指さしたあのでっかい入道雲は、天辺が横にくずれてジョンの耳の形によく似ていた。

*

木村のヨシ、笠原のテツちゃん、じろうの三人が防波堤の上を歩いている。

長い釣竿の大人が二人、残っているだけ。夕映えがはじまっていた。

中切れの端まで行って立ち止まる。

赤燈台の赤い灯、白燈台の青い灯がともるのはもう直ぐだろう。

「ジョン、ほら！」

思いきり遠くに投げたつもりのヤマユリの花は、ヨシの手を離れるとそのまま落ちて、やわらかく水面に浮かんだ。

浮かんで揺れている。それがジョンの顔の様にじろうには思えた。

浜わらし

じろう達の学校は、一学年男女とり混ぜの小学級で八教室、三百五十人ほどだ。

ごま塩石の門柱の右側には公立絵鞆尋常高等小学校と書いた瀬戸の大きな表札が埋め込んである。

校舎正面の真向いにグラウンドをはさんで貝塚の小高い丘があり、その前に立っているばかりか白長須鯨の肋骨、これが自慢のシンボルである。

じろうと鈴木ユッコが四年生に、松本セッコと大崎のショッコは五年生になった。ユッコ、セッコ、ショッコは近所の大人達から三餓鬼といわれている。

縄張りという程でもなく、はっきり線を引きしているわけではないが、子供たちは祝津の浜を三つの世界に分けてその事を至極当然と納得していたようだ。

漁師の子は親父の舟のまわりで遊ぶものだ。砂浜に出る二本の道路で漁師の家の集落も三群になっているから、自然にそう言ったのかもしれない。

左手の鯨会社寄りに一つ、右手は築港の坊主山につながる汀、その中間と三ヶ所だが、中央の土手には魚粕工場が三軒ある。大きな鉄鍋から捨てられる煮たき汁の油臭い流れが、やはり三本、波打際まで走っている。真ん中の連中は気にする風でもないが、坊主山側を『おれ等の浜』にしているじろう達から言わせるなら、かわいそうなあいつ等、なのだ。

ユッコ、セッコ、ショッコの三人だけは浜中をかけ回る。やんちゃで剽軽で、いたずらが大好きだ。授業時間中の鈴木ユッコは頭を下げて通しでコトリともしないが、ほかの二人も似た様なものだそうだ。

夏の初め、ユッコが赤禪で浜に現われた。まわりの連中は当然、口をとがらせ白眼を向けた。

六年生の佐藤のキヨが頭をこづいて「こら、ユッコ。生意気だど、お前。まだ四年生のくせして」

けろり、として

「オレ、もう生えてきたんだド、ほら」

禪の横からおどけた手つきで引っぱり出したのは、マツボみtainな海藻だった。

みんなは砂の上を転がり回った。次の日には浜中の子供たちの間に広まって、それを見た男の大人達は腹をかかえて大笑いした。

夕方になるとユッコは、父親の晩酌用に硝子の銚子を持って店に入ってくる。定って一合だが五勺の日もある。

枡の酒を移してやりながら、富やんが

「お前、生えたんだって？ 化けもんだな」

「あんちゃん、まだかい」

「バカ言え、俺のは本物だ。マツボなんかでないさ」

「ほんとか？ だってヒゲも生えてないベサ」

富やんは十七になる。

「うまれたまんまの坊主、ぼんず山の坊主だベヤ」

富やんは苦笑いだ。

「じつさい、お前には参るな。ホラ、こばすなよ」

由太郎がユッコの本名なら、ショッコにも大崎昭二という立派な名前がある。だが親兄弟からしてーしようじーと呼んでいるのを聞いたためしがない。じろうは長い間ショッコの本当の名前を知らなかった。

目の前のものは何でもけとばす癖がある。道路、路地裏、砂浜と場所を選ばない。埋立の原っぱではタンポポを摘んでいる女の子に追いかけられ、学校では小使いのおじさんに追いかけられる。廊下の羽目板を後ろ向きに踵でけとばすからだ。

店のショーウィンドの二十糎程のひび割れに符丁箋が貼られているのもショッコのせいだ。

謝りに来た母親が

「まあ、まあ、うちのショッコが割ったんだってかい。遠慮しないでばんばんやってやって頂戴や。わしの言うことなんか馬の耳に念仏なんだから」

弁償の印にナベコワシを二本ぶら下げた。

だからシヨッコの下駄の前歯はぎざぎざに欠けていたし、ゴム靴の爪先きはいつも穴が開いていた。

坊主山から防波堤にかけての岩場は転げ落ちた大きな岩も沈んでいて、じろう達の天国だった。潮が引いたあとの岩の窪みに昆布を敷いて、仰向きになった腹の上で小さなイワガニを遊ばせることも出来る。ゴメの白い翼を見上げながら温かい水の中でワレハウミノコと歌うことだって出来る。この岩場で一番颯爽としているのがシヨッコだ。

夏祭の夜店で買った水中眼鏡は、次の年にはゴムが死んでしまうから潜るたびに水がたまってくる。シヨッコが家から持つて来る眼鏡は古くて重いが立派なものだ。

突槍の五寸釘も、じろう達の様な棒に縛りつけただけのものではなく、先端の中心から突き出している。握りの部分にも綿糸がきっちり巻き込んであって、シヨッコに言わせると百発百中の原因はこれなんだそう。

ガゼ、ケガニ、ヒトデと何でも突き刺してしまう。一度だったがケーソンの根元で鰯をしとめた時はさすがに興奮して、三、四日はしやぎ通しで何にかにと蹴とばしていたが

「病氣か、よぼよぼの年寄りだったのよ。そうでないば、まぐれ当たりだ」

言って歩いたのは松本のセッコだった。

清蔵のセッコは棒の先に曲げた太い針金をつけている。雑品屋みたいに海の底から手当たりしだいに拾い上げて、宝物があれば土間の隅においてある石油缶の中に藏いこんでおくのだ。ガラス玉の首飾り、水の漏らない小さな鉄瓶、使い物にはならないが目覚し時計に幻灯器、編上げ革靴の片方、とりわけ大切にしているのは人形の骸骨そっくりのホネガイだ。

しかし、セッコには困った癖がある。

去年鉄道に入った謙吉あんちゃんと二人兄弟だが、母親はセッコを産んだ後一年足らずで亡くなった。婆ちゃんに育てられてきたこともあってか、女の人と見れば近づき触れたがるのだ。

二年生の春、遊び時間の運動場で走り回っていたセッコは、香代子先生の袴の下にスルツともぐりこんだ。香代子先生はものすごい悲鳴をあげた。

三年生になったセッコは高等科の女生徒に身体を押しつけ髪をひっぱってキヤアキヤア言わせた。

五年生のセッコはつい此の間、浜辺に座ってガゼの殻を割っていた小山内のおつか

あの後ろから、あの大きなお尻を撫でた。

「だれだあ、またセッコだな。しょうのない助平わらしだな、お前は」

振り向きもしないで、おつかあは笑っていた。

*

「おい、もう帰るど、火、消すべや」

セッコが海の水を汲んできて焚火に勢いよく、いち、にの、さん、で掛けた。

足で砂をかき寄せているシヨッコの胸に濡れた砂に混じって火の粉がとんだ。

「こら！ 気つけれや」

「まぐれ当たり、だ」

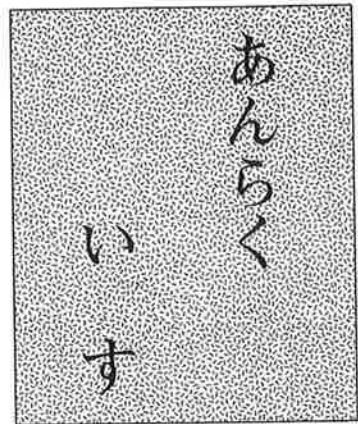
「……なに！ この色きちがいの雑品屋」

バケツを投げ捨てるや、セッコは猛然と飛びかかった。首一つ大きいシヨッコだったが足を払おうとして逆にひっくり返った。三分程もみ合って二人は離れた。

夏も終りになる。

鍋島山のコクワがじろう達を待つ季節が近づくの。

(終り)



ワルシャワにて

稲葉 真

ポーランドの主都ワルシャワに私共が着いたのは夜明け前だったので、案内されたホテルのロビーで朝がくるのを待っていた。黒い空からみぞれが降り出した。初夏の日本から来た私共には、急に冬に逆もどりの様で震え上った。次第に夜が明けて、木々は枯木の様に蕾も硬く、暗い街の壁に、鉛色の空があった。

やがて朝になって先づ私共はワルシャワ郊外にあるピラヌフ宮殿に案内された。十七世紀末に建てられたバロック風の離宮で小さいがパリのベルサイユ宮殿に似ていると言われる様に、大きな池を前に配した優

雅なたたづまいを思わせる建物であった。第二次大戦の折、ドイツ軍の侵入により、この宮殿の主な美術品はドイツに持ちさられ（一部は今レニングラードにもあるという）火を放った。大部分が焼け落ち、更に残った柱にダイナマイトをしかける穴をえぐった。又大理石の彫刻像を庭に出して、兵隊の射撃の練習のための標的にしたという。今再建されてはいるが、その痛ましい石像が立ち、壁にはこういう壁画がありましたと写真が置いてあつて却つて空しさを覚える。

ワルシャワの市街はドイツ軍とソ連軍の二重の攻防にはさまれて、全く元の形を残さない程の瓦礫の山と化した。ポーランドの人々は昔の写真や住民の証言にもとづいて、形や色迄ももと通りに再建する事に心血を注いだ。

公園にはシヨパンの像があり、広場にはコペルニクスの像が建ち、キューリー夫人の生家にも案内された。現在のローマ法王ヨハネパウロ二世もこの国の方と聞く。云わば、芸術・科学・宗教と云った各分野に最高の傑出した人々を生んだ国民が、どうして何度も戦火に会い、長い間占領された歴史の中で苦悩を味わねばならなかったのだろうか。私共を案内したワルシャワ大学の学生は云った。「ポーランドの不幸は全

国がほとんど広い平野であることです。南には少し山地もありますが大部分は、せいぜい百何メートルの丘陵がある程度の平野です。だから何時でも隣国の騎馬や戦車がまたたく間に攻め込める事が出来ず」これは島国に住む私共には想像以上の出来事が繰返された理由の様であった。

最後にユダヤ人のもと居住地区に案内された。今は広場になっていて、四角の大きな鉄色の記念碑が建っていた。ポーランド南部にあったアウスシュビッツの犠牲者の四百万（全体の犠牲者数は六百万という）の内半数がこの地区に住んでいた人々であったと云う。鉛色の空、黒い大きな記念碑の前に赤い花が捧げられ、一人の白い帽子をかぶり、黒いオーバーを着た婦人が佇み、うつむいたまま何時迄も動かなかった。

それからワルシャワを後にして、南西に五百キロ飛んだチエコスロバキヤの主都ブラハでは春の陽がさし、桜が咲いていた。ブルタバ川の向うの丘に美しい城が聳え、今は静かな「ブラハの春」があった。

付記 本文は稲葉先生から日立市医師会報（一九八七・九・第一五六号）のご恵贈をいただき、その中に掲載されている先生の文章を転載させていただきました。

死の判定は三徴候で

——心拍停止こそ死の証である——

高橋 陽夫

医学部一年目の時、生理学小実験で、トノサマガエルから摘出した心臓をリンゲル液に入れて拍動の有様を観察したことがある。摘出した心臓は、生命の付属物である五体から離れ、脳との連絡もないままなお拍動を続けていた。体重四キロにまで達することがあるという無脳児は、子宮外の生活は望めないが脳実質の全部を失い無呼吸ながら心拍のみで生きている。すなわち脳は精神の座、心臓は生命の座、心拍は生の証と考える。

以上は本誌五号「心拍こそ生の証」の冒頭に述べた通りであるが、心臓には自動能があつて独自で筋肉の収縮運動を繰り返し、循環によって酸素と栄養を体組織に送り個体の生命を維持しているが、脳にはこの能力がない。心拍停止は直接死を招くが、脳死は直接死の原因にはならない。脳死が確定すれば必ずやがて心拍の停止を来し死に至ることは、医学界の定説であるが、また

「心拍は生の証」である所以でもある。

「死とは全生活機能の停止である」という考えは、世界中広く通用している死の一般概念である。人体の生活機能は、脳、肺、心の三臓器によつて代表されるが、この三者がすべて機能を停止した時が死であることは一般に認められている。しかしこの判定法を古典的と称し極力排斥しようとする外科医がいるが、古典的とは「古くさい」という意味ではなく標準的、模範的あるいは普遍的と解すべきである。従つてこの標準的、模範的、普遍的三徴候（散瞳・呼吸停止・心拍停止）は死の公認判定基準として人体構造の変らぬ限り永久に慣用されると思う。人間の死は心拍停止によつてのみ決定され、心拍のある脳死のみが例外ではあり得ない。脳死患者の死亡も虚心坦懷素直に三徴候で判定することにすれば、目下論争の焦点にある脳死が死体か生体かの問題は一挙に解決されるだろう。倫理も国民の合意も全く不要である。

人の一生は心拍開始と共に始まり心拍停止と共に終る。脳死患者の一生も同様である。心拍停止前すなわち人が一生を終る前に心臓を摘出することは明らかに他殺行為である。心拍のある間人の一生は未だ終っていないのである。

体細胞は循環血液から酸素と栄養素を取

つて生活している。生活細胞の固まりである個体は生体である。従つて循環の原動力である心拍は「生の証」といえる。生命要素の供給を欠いた細胞は餓死する。餓死細胞の固まりである個体は死体である。従つて心拍停止は「死の証」といえる。

脳死「生きた身体に死んだ脳」からの心臓摘出は、生きた身体から取ることになり他殺行為である。脳死「心拍動がある死体」からの心臓摘出は、心拍が「生の証」であるから、生体から取ることになりやはり他殺行為である。

ある英国の医学者は「脳幹機能の不可逆的喪失は死の判定基準として、心拍停止と同様の妥当性をもつ」と説き、ある日本の法医学者は「脳、心、肺の中どれか一つが不可逆的に機能を停止すれば個体死である」と説く。いずれも三徴候法を否定し、心拍があつても個体死であることを強調している。「心拍ある個体死」とは、生（心拍）と死（個体死）が共存することで、現実的存在ではなく猟奇的存在でしかない。

日本医師会は本年三月二十五日、「脳死をもつて人間の個体死と認めてよい」と宣言しているが、心拍がある限り脳死は個体死ではなく生体である。胎内で心拍だけで生き続けている脳死同様の無脳児も、個体死と認めてよいのだろうか。生活反応の存

在と早期死体现象欠如は、生体肯定個体死否定の実証である。なぜ個体死なのか、その根拠の解明が切望される。人命救助なら法を犯しても止むを得ないと独走する外科医がいるが、法治国の国民であることを忘れては困る。脳死は死そのものではない。人間は脳死では死さない。心臓摘出術か心拍停止で一生を終る。

(一九八七・八・二〇)

医療^{しごと}辺縁の周辺

櫻庭 シゲ

波久島第八号寄稿お願いの案内をいただいた頃に、高性能機「MRI」が整備された旨の挨拶状もいただいた。道内で四番目、日胆管内では初導入、約二億円と云う高価額高性能医療器械との由。

MRI (magnetic resonance imaging) 脳診断器はスライス状に見るCTに較べて脳の形態を縦横斜等あらゆる角度から見られ、これまで見づらかった部分もきれいな画像に映し出す。CTで見えない部分は医師の経験に頼る事が大きかったが、MRIは我々にとって大きな助っ人。特に脳幹部の硬塞には絶対的な偉力を発揮すると五月十五日付の室蘭民報に説明されていた。院内も

そのために一部改装された由。なんと大掛りな事だろう。ふと顔を上げると、グリーンの矩形の室内灯油タンクが目に入った。あ、これは開院当時には無かった物、燃料が灯油になったので設置された物。一寸テレくさくやるせない様な思いがcaする。現代の医療はこういった高性能器械を操作し診断治療する時代なのか？すると日常繰り返し行っている私の仕事等は、まあ医療の辺縁とでも表現すべきなのだろうか？まあそんな程度のものにしかあたらないんだらうなあ。

十一時は過ぎていたが厳冬の日であった。「お久し振りです」。私「あらまあ」。二人の視線がカチンと合った。途端に「お互いに小さくなっちゃったね」異口同音である。「そおねえ。かれこれ二十年にもなるんではないかしら」。お互いに大女の部類に入る二人だったが、受付の小窓口で身体を屈めないで顔を見合せられる程に二十年の歳月の流れはこじんまりと二人共老化させている。ブルブル震えているのでストーブの傍に腰掛けてもらう。私の大好きな紫色、その紫を含んだ結城紬をきちんと着こなした姿は、たしなみ良かった往年の彼女を彷彿させ、ほんのりと明るく誠に好ましい。

両手を翳し乍ら「お久し振りなので少し

は小さっぱりしてと思ってね。身体をすっかり拭いたの。着替えてまだ身体が暖まらないのに約束の車が迎えに来てしまつてね。寒がったりして「免なさい」と弁解し乍らも気分がほぐれて来たのか話しはじめた。

「去年転んでね、足を骨折して半年も入院してしまつてね。今でも一ヶ月に二、三回は治療に通うの。今日も行くだね。入院当時は二人部屋で静かで良かったんだけど、大分快くなつたからつて二ヶ月位したら大部屋に移されたの。そうしたら其処にはもう五年も入院しているという人が居たね。それボスよ。同室の入院患者に何かと命令するのよ。患者さんも老人が多いからなかにはトイレに行く途中にポタポタと小便をちびる人がいるんだわ。するとボスは大声で『ああ臭い臭い』だれそれと名指しして『お前すつかり拭いて置け』と命令するの。そのくせ自分は一日に一回は必ず『あゝ、退屈だ退屈だ』と咳き乍ら、フラトスしながら（ブーブーと臭いおならをたれ乍らと彼女は表現した）ぐるぐる室内を歩き廻るの。痛くて、苦しくて寝ているのに五月蠅し、落着かないし、不潔だし、ほんとうに一日が長くて辛かったわよ」と思い出しても不愉快と云わぬばかりに顔をしかめながら一氣に話をした。

どんな社界にも「ボス」や「いじめ」が

有つて成立しているとは承知しているが、こんな老人病室にまで存在するとはつゆ程も考えていなかったので大袈裟な表現だが愕然とした。

かつて、緊急で私も病室がなくて大部屋に入つた経験が有るが、幸にも皆心やさしい人達で闖入者を直ぐに仲間入りさせてくれ、かるた会の話や、孫の小遣い銭の話、美味しい漬物の漬け方とか、広告上手に誘われて観光旅行に出掛けたが、余りの粗末さに這々の態で逃げ帰つた話など面白おかしく話を聞かせてもらい少しも退屈せず、楽しい時間を過した思い出が残っている。

だがこんな重苦しい雰囲気病室では、定めし憂鬱だつたろう。それだけ恢復も阻まれたのではなからうかと、又、近年老人医療の在り方にスポットが強く当たっているが、こんな事柄等も関与しているのかなあなどと頭をかすめる。

身体も暖まり落ち着いてきたのだろうか一寸口を噤んで一息入れていた。

やがてすーっと顔を上げて語調も改めてまたボツリと話し出した。

「あれからね、思いがけない色々な事が有つたのよ」。成る程、そう云えば住所氏名も変つてゐる。

「恥かしい話だがね、うちの爺さん(夫)たらしい歳してバーの若い女に入れあげて

挙句の果に駈落ちして失つたの。自分が住んでいた家、私も生活している家よ。それを私に一言も話さず売つてしまつて、そのお金を持つてなの。何んにも知らないでいる私の処へ覚えのない買物で店からは借金取りは来るし、事情を知らぬ買主は催促するしね。知らないんだから私はそんなこと承知していいと云つたらね、弁護士がね(憎々しげに)『持主の名義は旦那一人で貴女の名前は書いてない。名義人が承知で行つた事で、貴女が文句を云う権利はないんだ』とさ。その時、ツーンと突き刺さる様な鋭さで浮んだ言葉が有る。「法律とは誠に非情な物だ」。曾つて亡夫が私に教えた言葉だ。調停委員でもあつたので、何にか痛切に感じて云つたのだろうか、当時の私は理解出来ず聞き流して失つた言葉だが、今、成る程そう云う事かと、やつと理解出来た。何んとむごい話でないだろうか。おそらく二人で営々として築いた財産であつただろうに。これだけの言葉の偉力?。無情、残酷と一般社会は考えないのだろうか?。定めし無念の思い拭いきれず、今尚心中深くとぐろを巻いていることだろうに。頭の中は強力な物でひっ掻き回された様な混乱で仲々相手への言葉が浮んで来ない。やつと「あのー、こんな言葉を聞いているよ。人に無情な事を行つて悲しませた人は

何時か何処かで、全く思いがけない人から自分が嘗つてやつた事と同じ事をきつと仕返しされるものなんだつて。それが此の世の掟なんだつてよ」。「うーん。当初はね只々、世界一私は不運者だと悲しんだよ。でも少しづつ月日が経つにつれて、私よりも年上なんだし、お金だつていつ迄も有るものでなし、世間だつてそう甘いものでもないね。きつとろくな事ないだろうとね。隣れにも思うんだよ」と案外淡々と、かえつて動転している私をじつと見つめ乍ら云つた。然しその瞳はうつすらと潤んでいた。なお云い度い言葉も思いついてたのだがそつと呑み込んで潤んだ瞳をじいつと見つめた。一方だけの話なので真偽の程は定かとは云えないかも知れないが、全くの作り話とは考えられず、旧知の善良な老人の無惨な過去と受けとめられて心はゆさぶられ憤懣やるかたない思いが今もなお消え去つていない。思いついた言葉とは、嘗つて週刊朝日に掲載された記事で、故佐藤栄作首相が、左遷されたとか、人に貶められたとか泣き事を云つてくる議員やサラリーマンにきまつて云う言葉で、「君に不利益をもたらした上司を決して恨むなよ。その代りその男を徹底的に軽蔑するか、無視して、自分で一層努力すればいい」と助言された。至言と心に刻み込んでゐる言葉です。

発達行動と私の画

吉原 璋

私の絵は幼年期に親の願望による「絵がうまい」という誘導で始動し今日に致っているようである。

大人は無責任にも同年代の子供より些か変った絵を画いている子供をみて上手、おもしろい絵などと囁し立てる場合が多く、更に親は家系の長所をいくらかでも遺伝的に備わっていることに期待を寄せて自分の子供から発見したがるものである。私の母は絵が好きであり、母方の祖父も絵が上手であった。前述の様な期待と願望から我が子に「この子は器用で絵がうまい」と云う言葉を吐いてしまったのだろうと想像する。決して我が親を無責任などと誇るつもりは毛頭ない。むしろその期待に反して私の絵が一向に上達しないことを悲観し、その変遷を辿り、私の様に育つ子供もいるのではないかと危懼するのである。

人間社会の文明発達を辿ると、集団生活をするための意志の伝達法を知り、生活必

需品を先づは知恵をめぐらして工作すること

に始まり、絵が画かれ、言葉が整理されると同時に記録、文字へと進んで来たのではなからうか。個体の発達もその縮図と考えられる。泣く、笑う等の単純な伝達法と、それに呼応する親の行動のコピー、言葉が現れ、手指の動作が出来る様になると起立・移動、攝食をおぼえ、○△の単純な絵を画く作業をする様になり、四、五才でやつと規則のある人為的な字を書くことが出来る様になると同時に本を読むことが可能となる。これら一連の自然な発達経過に異論はなからうと思う。しかしこの自然な経過に特定の環境因子が刺激を与えたらどうなるであらうか。

人体実験は多少を問わずしてはならぬ不分律があるが体験例の処理によつて推論することは許されることであり、以下の様な刺激を与えられた子供の発達の追跡を試みては如何と思う。

- ① 執拗に言葉の刺激を与える。
- ② 絵を画く事に興味を起させる刺激を執拗に与える。
- ③ 書字に興味を起させる刺激を執拗に与える。
- ④ 音に興味を起させる刺激を執拗に与える。
- ⑤ 特定の運動を向上させる刺激を執拗

に与える。

等々

よく大人の興味本意に幼児特種教育だの天才教育などと云つて特定の刺激を与えて育てた効果について報告されているが、子供の発達順序との関係についての追究された報告はその途の専門でない私は読む機会がない。即ち子供を天才音楽家に育てよう、天才書家に育てよう、特定のスポーツ選手に育てよう云うある特種の目的のもとに育てることはなされている。しかし母親が家事をほったらかして讀書に耽ける家庭環境にあった子供は本を読むことが好きになると云うより本はその様に読むものとして、周囲で何が起きようが無関心に読む事に没頭する子供に育つ。この事象は母親が意識的にその様は読書家の子供に育てよう云う目的のもとになされた結果でなく、環境による子供の発達変位ととらえることが出来るよう。

私のように絵が上手だと云う親の遺伝継承期待観からの不用意な言葉に刺激され、字を書くことより、本を読む苦勞より絵を書いて褒められる安慰な道に発達変位した例もある。今は両親とも亡く、人生の後半に至りこの様な事象に気付く自分を恨めしく思うのである。もし「お前は絵が上手だ」と云う褒言葉がなかりせば私は字も人並、読書量も多かったかもしれない。褒める教

育を推奨する教育者がいる。私の最近まで叱る教育より褒める教育に賛成していた一人であったが、褒める教育も注意が肝心であることに気がついた次第である。

褒められるとつい又褒められようとする期待した行動を繰えすようになり、その動機は不純で、人に褒められようとする意識が常に低迷した行為になる。従って褒める人、見てくれる人が居ないとその行為は鈍化し、目的の一部を失った行為となりがちである。即ち甘えの行為に低迷し、それ以上の発達は頓挫してしまう。親に褒められた絵は何時迄たつても稚画の域を出ない絵となり、学校の先生に褒められた動機からの絵は童画の域を出ないものに終始する。美術学校出の人の多くは学生の絵にとどまり、私は人の絵について云々述べようとしているのではなく、自分の絵を見てつくづく情けなく思うのである。そして母を失って絵を書く気持ちが半減しているのに気付くのである。絵を画く行動は人が為せる一番初步的な行動でなからうか。臨画・素人の写生は、その單純な行為でしかない。機械・器具の発達しない時代において、上手に臨画すること、似ている様に写生することは記録の一手段としての評価はあろうが、カメラ、コンピューター作画等々機器の発達した現在に至ってこの様な評価は機器が精巧であ

ると云う価値に他ならない。

富岡鉄斎の絵には字が含まれており、平素何等不思議なく見すごして来たが、発達の行動の關係からその絵の価値を再認せざるを得ない気持ちになる。西洋画と南宗画、大和絵との比較と云うより絵と字の本質に最近興味をおぼえていたので今更のように富岡鉄斎の画に興味を感じたのである。

エコール・ド・パリの作家パスキンは「近代日本画壇の持つ唯一の世界的な画家である」と、サンパウロ・ビエンナーレ展の審査員マリオ・ペドロザは「ゴヤ、セザンヌとともに十九世紀の世界三大画家の一人である」と富岡鉄斎の絵を評している。実際これらの評をまたず、セザンヌと共通な印象派ルノアールの色彩的渾沌味、ルオーの神秘的宗教味、ゴヤの理想主義対写実主義の相克等々を鉄斎の絵に見出せるが、これらを評した前述の画家達も所詮、色採的特徴、構図等々の創造的源泉からの評価のみであり、絵に含まれる漢字を読んでの評価ではない。

聚沙為塔図などは私の好きなルノールの筆致に似ており、更に左上辺の字、落款を含めて絵全体が構成されている。その字を消して見ると何と間の抜けた構図となることか。又その字を読まなくてはその意図を知ることが出来ないことを知って、今更な

がら書画一体の芸に特性があることを見出したのである。即ち字がなければ大和絵、南宗画の位置づけの特性がなく、字は絵の上に位置づけられていることを知るのである。何故なら漢字は字型そのものに変化があり、絵画的要素から発しており、更に一字一字に意を含んでいるからである。絵のモチーフとしてこんな便利なものが他にあるであらうか。黒白の二色も墨の濃淡、密度、墨粒の流れ、筆運による滑潤、にじみ画面の余白の珍味等々字だけのモチーフで立派な画となり得るのである。さらに字は意味があり、その選択で言葉になり、その絵の意図を作者を自ら説明しているのである。西洋画においては後世の人が勝手に解釈をしなくてはならず、作者はあの世でその意図とあまりにもかけ離れた解釈に腹をかかえていることもあり得るのでなかろうか。

以上述べた様な理由から絵を画き出す時期は少くとも頭の中でメチエエを構成出来る時から始まると云える。私も只今からやつと眞の絵筆をとることにする。何点の絵をものにすることが出来るか誠に心もとなない次才である。

マイプラン・

ニューヨーク八日間の旅

後藤 正邦

連休を利用して、自由行動を主とした旅行企画はないものかと探して居たところ、結局えらんだのが表題のツアーです。ニューヨークに居る女婿のY君との約束もあるし、何よりも生後八ヶ月まで我が家で育てた二人の孫達に一年振りで会うのが楽しみで参加しました。

五月一日十二時成田発。十二時間のフライトの後ケネディ空港着。入国手続きを終えて空港外に出たのが現地時間で五月一日十二時です。この十二時間のタイムスリップで頭が惚けないようにするため、ジャルパックのガイドが俗に言う御上りさんコースを夕方まで案内してくれます。

出発前に平仮名で「しん」と書いた中華料理店で晝食をとりましたが、経営者も従業員も中国人だそうです。エンパイアステートビル。ニューヨーク州の愛称を冠したこのビルは、六万トンの鉄鋼と当時のテクノロジーの粋を集めて一九三一年に完成。

雲一つない晴天に恵まれて一〇二階の展望室からの眺望は壮観です。南北十五キロメートル、東西四キロメートルの島の上に林立する摩天楼の群は実際に見るとそれなりの迫力があります。

バッテリー公園。マンハッタンの南端にありニューヨーク港の眺めはすばらしい。一八八六年以来港のシンボルとなっている自由の女神が間近かに見えます。スタッテン島やリバティ島を結ぶフェリーが行き交います。

国連本部ビル。四つのビルがあつて、国連総合ビルだけが一般に開放されていますが見学者が多いところです。地下のギフトセンターには世界各国の土産物が陳列されていて無税で買うことができます。

最後はクラシック音楽と舞台芸術の中心であるリンカーンセンター。正面にシヤガールの壁画で飾られたメトロポリタンオペラハウス、右にニューヨークフィルの本拠地エイベリーワイッツシャーホール、左にニューヨーク州立劇場がありこれらに囲まれた広場でコーラスグループの野外公演が行はれていました。ジュリアーズスクールもこの一角にあります。

グラントハイアットの二七二四号室

このホテルはパーク街と四十二丁目の交差点にあつて屋内通路でグラントセントラル駅と連絡し、駅はパンナムビルと続いています。これは雨天の日など覚えておくとう便利です。中二階にジャルバックラウンジがあり、気軽に旅行の相談に応じてくれます。一週間滞在することになった二七二四号室の窓の外にはレキシントン街をはさんで美しいクライスラービルが目前に迫るようになっています。娘が寝酒用のオールドパー、電気湯沸器、一週間分のティーバッグと紙コップ等を戸棚に用意してくれました。テレビはゲリー・ハート議員のスキヤンダルを繰返し放送し、訪米中の中曽根首相はちらつと見ただけです。夜は地元のヤンキースとメッツの試合を放送しています。最初の朝在室中に太った黒人のメイドが無言で入ってきて掃除器をかけはじめたのでびっくり。チップをやつて後でくるように頼むとそれ以後は廊下で会つても愛想よく、外出中に掃除するようになりました。

ニューヨークで日本料理を賞味する

ホテルの朝食は一度食べてみたがどうも口に合はないし前日に予約するのも面倒です。ホテルの近くに日本人経営のレストランが沢山あるのでこれを利用することにし

ました。

浪波、嵯峨野、吉兆等がそれです。くつろいだ気分でゆつくり夕食をとり帰りには朝食用のお握りとお新香をつくってもらいます。トラベラーズチェックで支払いドルで釣銭をもらいます。料理もおいしく特にハリファックス沖でとれる新鮮なロブスターの生き造りやチェサピーク湾産の脱皮直後で甲羅の軟らかい蟹の丸揚げが一品料理として好評です。

マンハッタンの夜景

マックスウエルズ・プラム・レストランでフルコースの晚餐を楽しみながら日没を待ちます。格としては一流の下と言うところでしょうか。トイレットルームに黒人のサーバーがいて一回使用する度にチップをとられます。腹ごしらえを済ませて出発。

当地で最も美しく最も古い吊橋と言はれるブルックリン橋を渡ってブルックリンに行き、リバーサイド広場からイースト川の対岸に広がるマンハッタンの美しい夜景を眺めます。晝間は何気なく見ていたビル群の尖塔はイルミネーションに輝き、橋もピタも道路もすべてが夜の装いを凝らします。再びマンハッタンに戻り今度はニューヨークオの一の高さを誇る世界貿易センタービル

の一〇七階の展望室から眼下にすばらしい夜景を満喫します。このツインタワーは日系二世のミノル・ヤマザキが設計し、建築資材の調達には三井物産、使用した鉄鋼は新日鉄製で一九七三年に完成。この様な事情もあってか一時期はニューヨークの不評を買ったのですが、今ではエンパイアと共にマンハッタンの観光の名所となっています。昔のキングコングはエンパイアステートビルから墜落死するのですが、新作の映画では貿易センタービルに変わっているのも興味ある事です。

Y君宅に一泊。蕁麻疹で寝不足する

三日の日曜日Y君の車でホテルを出発。ドライブの前にアメリカ自然史博物館を見学する。四階には骨や足跡の化石の大きさから推定して造られた略実物大の恐龍の骨格像がずらりと展示してあって、地球が一億数千万年の長い間恐龍の惑星であったこと、この事実を百数十年前までは誰も全く知らなかったと説明されています。各階をあわただしく見てまわりマンハッタンを離れます。ジョージワシントン橋を通過してハドソン川を渡りニュージャージー州に入ります。北に向ってパリセーズインターステートパークが続いていて、この公園の中

程にあるアルパインの近くに日本人が経営するジャパニーズ・レストラン・イシンがあります。丁度晝食時で久し振りに天ざるを食べました。北上して再びニューヨーク州に入ります。そのまま進むとウエストポイントに行けるのですが、途中でハドソン川にかかる最長のタッパンジー橋を渡ってから南下してタカホのY君宅に着きます。

すばらしい環境にめぐまれたアパートで、孫達のがびのびと育っているのが嬉しい。この夜は蕁麻疹がひどくなって良く眠れませんでした。これは二日にサウスストリート・シーポートを見物に行った時、フルトンマーケットビルのシーフードレストランで晝食をとりましたが、その時に食べた生がきが原因と思はれます。翌朝Y君一家の主治医であるドクター・ジュンコ・エミに御礼の御挨拶がてら治療をお願いしました。ブロンクスのリバーデールにある診療所で特続性ステロイド剤と抗ヒスタミン剤の注射を受け寝酒をやめるように睡眠剤を処方されましたが、これは遂に飲まざじまい。寝酒の量を半分にしました。

ナイアガラ滝

五月五日。天気予報ではナイアガラは曇り気温五度位らしい。ラ・ガーディア空港

十一時四十分発。約一時間でバッファロー

空港着。バスで高速道路を滝に向います。

エリー湖とオンタリオ湖の間に約四十六キロメートルのナイアガラ川があつて、この川に、川の中にある島としては世界最大のグランディアランドと、大ききではイグアス、ビクトリアにつぐ世界オ三位の滝があります。初めてこの川を見たフランス人が美しい河川・フラーブと言ったのがバッファローの語原で、ナイアガラは先住人の言葉で大きな音を意味するそうです。このグランディアランドを通りナイアガラ町の町を遠く迂回して、レウイストン・クイーンストン橋を渡るとカナダ領です。パスポートの検閲を受けてからナイアガラパークウェイを滝に向います。高さ九十九メートルの展望塔ミノルタタワーの塔頂にあるレインボー・ダイニングルームで晝食をとりながら眼下に眺める滝は実にすばらしい。

この滝は、ゴート島をはさんで幅三二〇メートルのアメリカ滝と七六〇メートルのカナダ滝に別れ、五〇メートル位の落差で落下します。特にカナダ滝は馬蹄型で瀧壺から膨大な水煙を吹き上げています。ケイブルカーで川岸に降り、全員が青色の雨合羽を頭からかぶってメイド・オブ・ミストと言う名の船にのります。滝の直前まで近づくと激しい揺れと水しぶきで動く事も出

来ません。

天気は予報に反して快晴、気温は二〇度位。紺碧の空の下、クインビクトリア公園はチューリップ、サルビア、マリーゴールド等が一斉に咲き乱れ、カナダ滝の水煙の中に大きな虹が現はれて最高の歓迎を受けた気分になります。

午後六時バッファロー空港発。一時間位でニューヨーク空港着。高速道路とハドソン川底のホーランドトンネルを通つてマンハッタンに入り、八時過ぎに早くもホテルに到着します。この時ルームサービスでとつた夜食の料金三三ドル・七七セントの請求書が、ホテル側の付け落しでしょうか一ヶ月後室蘭まで追つかけてきておどろいた次第です。

セントラルパークと五番街

セントラルパークの南口には幌馬車がざらりと列をつくつていて、これに乗らないと公園に入れないような気持ちにさせられます。二〇分の約束で幌馬車にのつて公園の中を見てあるき、馭者にカメラを渡して記念の写真を撮ってもらいます。それにしても四〇ドルの料金は高過ぎます。

シユワルツ、ティファニー、グッチを見物してロックフェラーセンターの広場で休

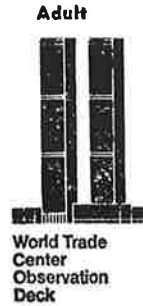
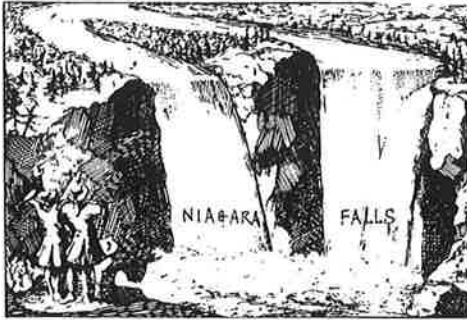
憩します。名のある高層建築がこのセンタ―に集まっているのは見事なのですが、五番街の東側にある聖パトリック寺院はさすがに気分にはさせてくれます。高さ一〇〇メートルのゴシック調の美しく壮大な建物はしばし目を奪つて放しません。結局ホテルに近い高島屋で殆んどの買物をすませる事になりました。

五月七日。ニューヨークを去る日です。

長い間利用させてもらったセイフティボックスのキーを返し早目にチェックアウトを済ませます。見送りにきた娘や孫達と別れを惜んでもきりがないのでホテルにタクシーを呼んで先に帰宅させます。孫達は明日にも会えるかのように元気よく手を振つて去って行きました。十一時三〇分ホテルを出発。クイーンズ・ミッドタウントンネルを通つてケネディ空港に着き、免税店で最後の買物をします。真つ先に目についたゴールデン・シャポー・グースを注文すると、店員が一人付きつきりでサービスしてくれました。午後一時三〇分、ニューヨークに別れを告げます。

復路の飛行時間は約十三時間で当然の事です。が日没はなく強い日差しを受けます。シャッターをおろして和洋二本立ての映画が上映されました。このツアーの企画はエ

コノミークラスですが、エグゼクティブに変更してもらって本当に良かったと思います。往復二五時間は機内で過ごしますから、機内サービスが良いと旅行の楽しさを更に深めてくれます。



MMM紀行文

塩澤 英光

去る6月27日(曇)MMM(ムロラン・メディカル・モーターリストクラブ)のドライブ旅行が行なわれました。今年はMMCの二十五周年につき、一泊二日の旅行となり、幹事は鴨井(内科)先生です。湾岸道路脇の日本石油木材置場に集合したのは、午後2時5分でした。ちなみに一番のりは大岩先生でありました。総勢、車15台、大人四十四名、子供十数名、予定時刻を過ぎていたので、すぐに出発となりました。

伊達市内を通過し、蛇田から洞爺湖に曲がった所で一時停止し、全員が揃うのを待って再び出発、途中3ヶ所道路工事などで片側通行の所もありましたが、洞爺湖を展望するサイロのあるドライブインまでは、眩しいくらいの晴れの天候にめぐまれ、新緑の色を楽しみながらの旅となりました。各自小用をたしたのち再び走り出した頃から曇となって、ルスツ高原遊園地を過ぎる

頃よりあいにくの雨となり、第二番目の集合地点である中山峠では本格的な雨となっていました、車からおりて見物する人もまばらで、再び集合後、早々に目的地の定山溪温泉へと走り出しました。小雨の中、午後5時15分頃に無事、定山溪ビューホテルに到着しました。

ホテルの部屋割りの券を大岩先生が配られ、夕食・朝食の予定を幹事の鴨井先生が告知されたのち、各自自分の部屋にて休息しました。MMCの役員の人々はすぐ宴会の一番の楽しみである景品の準備と会の進行の検討を始めました。若輩ながら今回は私もお手伝いさせていただいたのですが、その準備に、宴会開始時刻6時30分ぎりぎりまでかかり、あわてて会場へとかけつけました。早くも入浴をすませ浴衣姿でくつろいだ方もいらつしやり、上田先生の開会の辞のあと、なごやかに宴会が始まりました。ごちそうに舌つづみをうちながら、大人・小学生以下の子供・カラオケ部門と景品の抽選を行いながら、和気あいあいのうちに宴会は順調に進みました。私は、夜8時頃家族といっしょに入浴のため先に失礼させていただきましたが、幹事の鴨井(内科)先生は本当に御苦労さまでした。

部屋に戻ってから子供の準備をし(オムツを換えたりetc.)入浴、大浴場は広かった

のですが、熱い湯が少なく、ぬるい湯やプールが多くて、子供には申し分のない浴場でした。全体としてはサンパレスの延長という感じですが、露天ぶろもあり、けっこう広かったのですが、湯がぬるかったり、サウナブロが暑すぎたりで、さんざんな入浴でした。部屋に帰ると、母から電話があり「韓国民族舞踊団のショーを見に行かないか？」とのこと。急いで着換えし、地下（一階）のデイスコハウスに行くと、ステージがもうけてあり、もう始まっていた。オレンジジュースと水割のウイスキーが飲み放題で、ショーは一幕と二幕に分かれており、その間に韓国の民芸品やサイン入りプロマイド・色紙（もちろん韓国のスターの）を、ダンサーが観客の席をまわって売りに来た時は、外国まで出かせぎに来る外国人の強さというものを感じました。終わったのが10時すぎで、雨の上がった外を一人で散歩し、豊平峡ダムで水量の減った川を、橋の上から望めながら、むかし父と定山溪に来た時の激流などを思い浮かべていましたが、冷えて来たので部屋に帰って入眠しました。

翌日は晴れにめぐまれ、8時頃、朝食のバイキング（洋食&和食）を食べにレストランファミリアに行きました。和食に、きつまいもを入れたおかゆが出て、うめぼし

がおいしかったです。周囲には、各先生方がちらほら見うけられ、昨夜お酒をめされた方は、さすがに簡単にすまされているようでした。中でも、さいとう（外科）先生が「おはよう／＼」と、お声をかけられ元氣はつらつという感じでした。

午前8時半頃、ロビーにて、大岩先生、鴨井（外科）先生に挨拶し、チェックアウトしました。冷蔵庫の中味の使用は、すべて自前としたため朝はバラバラの出發となりましたが、チェックアウトの時間が9時までというホテルの規則は、早すぎるように思われました。

札幌方向とは逆に、一路豊平峡ダムへ向かいました。国道からはづれてしばらく行くと、いなかの雰囲気となり、分岐点という所でバスに乗り換えて電気バスの乗り場まで行き、トンネル前からは、沖縄海洋博覧会で使用されたという電気バスに乗り、豊平峡ダムのバスターミナルへ。2つのトンネルの間から谷へ降りていくハイキングコースなどがあり、また来てみたいなあと感じさせる溪谷が開けていました。展望台までは徒歩でいささか急な昇り坂でしたがダムからの放水を見ると、自然の滝を見る様な感動を覚えました。放水は霧のようにくだけ散って、天氣が良ければ虹でも見えるかのようでした。バスの発着は一時間ご

とで、ちょうど良い感じですが。また分岐点までバスを乗り継ぎ帰って来ると、駐車場は満車で、人がごったがえしており、早く来てよかったと胸をなでおろしました。

ドライブの2日目は、自由行動で、我が家は家族サービス。円山動物園に向かいました。札幌の大通りまで出て左に曲がり、つき当たりまで行くと行き止まりになっており、そこで車を止めて、動物園まで8分間の徒歩、途中どこかの幼稚園が運動会をやっており、ちょうど正午だったため近くの店で弁当を買い、運動会の家族連れにまじって芝生で昼食をとりました。

円山動物園は、むかしと大部分変わっており、子供の動物園というコーナーがあり、子供が動物にえさをやったり、さわったり出来る場所で、特に小動物が集めてあって子供たちが「キャッキャッ」とさわぎながら走りまわっていました。全体の半分ほど廻ったところで、長男も、だっこをせがむようになったため、今回はこれまでにしておこうということになり、また8分開けて大通りの端まで歩いて帰って来たところ、警察が来ていて駐車違反のチェックをしているところでした。早々に車に乗り込み発車、難をのがれました。大通りを逆にもどって来ると右折出来る所が少なく左折または直進の場所が多く、テレビ塔の一步手前

でやつと右折することが出来ましたが、同じく右折する車が多く、三列になった車が多くなつていくため、のろのろ運転となつてしまいました。広い道路でも渋滞するものだなあと、しばらくぶりで川崎の狭い道路や街での渋滞を思い出しました。やつと右折出来、ススキノあたりから国道36号線に入る予定でしたが、明確な標識がなく今度は行きすぎてしまいました。あわてて豊平川の方へ左折し太い道路につき当たりましたが、36号線方向に右折禁止の道路で、豊平川ぎりぎりの道まで行つてやつと左折すると右折して、なつかしの国道36号線に入ると故郷に帰つて来たような安堵感を覚ええました。まだまだ走つたことのない道の多い北海道ですが、都会の道はどこも走りにくいと痛感しました。北広島より道央自動車道に入り帰つて来ました。いそがしかったのですが、日曜日としての実感は得られたように思われました。

今回のMMMCドライブは25周年記念ということで特別であり、一泊旅行となりましたし、車の故障時等のトヨペットのサポートもありませんでしたし、医師会の青木さんも来られなかったし、大岩先生も一日目の夜、会議だとかで札幌にお出かけで、いろいろと忙しい旅行でした。

もともとMMMCは、毎年一回、日帰り

で好きな所に行き、うまい物を食べて、景品をもらつて帰るといふ、単純な自動車が好きな人々の集まりなので、多くの他の室蘭市医師会員の参加をお勧めします。勤務医の方でも、行事は日曜日で、しかも年一回ですので参加しやすいと考えます。医師会の中においても、内科・外科などの科をこえて楽しいおつき合が出来ると数少ない会合の一つだと思ひます。

あやつと原稿がうまつた。もともと素朴な会であり、その内容を書けと言われなくても、自動車の運転中は、運転以外の事は一切考えない主義ですので、何を書くのかと非常に苦労しましたが、ズラズラと、あつたことを書かせていただきました。読んで下さった方、御苦労さまでした。

第21回全道ドクターズ

ゴルフ大会に参加して

皆川 芳徳

第21回全道ドクターズゴルフ大会は、函館医師会主催により、大沼国定公園内にあり北海道のゴルフ場の中でも名門中の名門の誉れたかい北海道カントリークラブ大沼

コース（Aクラス、ハンデ14以上）と函館大沼プリンスゴルフコース（Bクラス、シニア）に於いて、去る7月19日開催されました。

当日は、前日までの台風5号の影響により荒れ狂った天候が嘘の様な晴天にめぐまれ、駒ヶ岳もくつきりと聳える両コースに約一八〇名の先生方が、北海道の名地から参加してきました。当室蘭医師会からは、地元函館医師会、札幌医師会について大量十五名の先生方がA、B両クラスに出場するという盛況さで、当医師会のゴルフ熱の高さを全道の先生方に知らしめたと思ひます。

旧交を暖めるため前日より函館に乗り込んだ先生方は、当初の決意とは裏腹に、午後の十時が十二時に、最終的には午前二時まで飲み続けてしまい、案の定、二日酔いの状態にて出場するという、最悪のコンディションであつたとの事です。又、当日出席組は、まだ夜空に星が煌らめく午前三時半に検査センター前に集合、恵愛病院のバスに乗って出発するという、これ又、強行スケジュールでありました。

私の出場した大沼コースは、全国でも五本の指に入る難コースで、挑戦意欲のかきたてられるコースです。最近ようやくゴルフの調子が上向きになり、又縁起のいい大

会でもあり（第十九回大会優勝）、内心夢
よもう一度と考えていた私は、インコース
の一番ティに七時四十二分に立ちました。

第一打は、最近の調子を示すがごとくナイ
スショット、一打の落下地点がドッグレッ
グしているという難ホールを最短距離にカ
ットする二百メートル以上のロングドライ
ブでした。しかし、高揚する心を抑え、慎
重に、我慢するのだと自からに叫んでいた
のもここまで、第二打をいきなりシャンク
（今年の前半このために何度泣かれた事か）
して林の中、第三打は出すだけ、第四打は
トップ、あがった時はトリブルボギーとい
うあり様。それ以後は、難コースにもて遊
ばされ自分の下手き加減を認識させられた
だけでした。しかし、名門コースといわれ
るだけあり、今は再度挑戦したいという気
持で一杯です。この様なコースを設定して
いただいた函館医師会の先生達に対し、深
く感謝したいと思います。

Bクラス、シニアの行われたプリンスコ
ースも、距離もタツプりあり、池と多くの
白砂バンカーにかこまれたコースで、かな
りの先生方が苦しめられた様でした。

懇親会は一時半からプリンスコースのク
ラブハウスで行われました。まずはハウスの
庭園にてビールパーティが、函館の奇麗
どころのサービスつきという豪華版で始ま

る。芝生に坐って今日の戦績を医師会仲間
と、又遠方より来た旧知の友と談じている
様は無邪気なもので、ゴルフをやっている
者でなければ味わえない楽しいひと時でし
た。二時からはハウス内にて生バンドの演
奏する中、懇親会、成績発表が行われまし
た。フルコースの食事を食べながら成績発
表を聞く。当医師会の先生方、かなりの悪
コンデションであつたにもかかわらず、A
クラスに於いては、西田先生の二位をはじ
めとして、足永先生、皆川の入賞、Bクラ
スに於いても、児玉先生、原田先生の入賞、
阿部先生のブービー賞獲得と、全体的には
まあまあの成績でありました。

帰りは神島先生を除く他の参加者全員が
バスに同乗、まずは、畠山先生が懇親会会
場より仕入れてきたアルコールにて宴会が
始まる。乗っているのはゴルフ狂の先生達
ばかり、今日のゴルフの戦績をあれこれ話
しているうちに、あつという間にガス欠と
なり、早速森にてアルコールを仕入れる。
ゴルフ談議は時間をおううち益々エスカレ
ート、それに伴ないメートルもあがり、八
雲に到着する前に再びガス欠となる。また
八雲でアルコールを調達、あとは室蘭に着
くまで、阿部先生を中心に最後の最後まで
ゴルフ談議に花を咲かせた一日でした。

尚、次回開催地は帯広医師会主催との事

です。当地からは遠方ですが、この大会の
意義を考え、又開催医師会の御苦労を考え、
数多くの先生の参加を希望します。前日よ
り出発の先生には、おいしい生豆（？）も
あるとの事でした。



編集室へのお便り

初冬の候となりました。

御無沙汰申し上げておりますが皆様御健勝のことと存じます。

此の度は波久鳥第7号御送り下さいまして誠に有難うございました。大変なつかしく拝読させていただきました。いつも忘れずにお送り下さいまして感謝申し上げます。先月は北大登別分院の五十周年に際し、大岩先生、千葉先生などにおめにかかり大変嬉しく存じました。小生もお陰様で元気でおります。

会員の諸先生によりしくお伝え下さい。

草々

静岡県田方郡修善寺町柏久保一・二一〇

斎藤 幾久次郎

(61・11・24)

拝復先般「波久鳥」一部御恵送いただきまして誠に有難う御座居ました。懐かしく拝見させていただきました。約十二年余りの貴医師会員でしたから何彼につけて気になるのは御地の事どもです。先ず天気予報

に始まって……当地は案外凌ぎやすい状態ですが七・八程は雪が積って居るでしょう。六、七、八月は好いそうです。

諸先生の御健勝御活躍を祈り上げて居ります。有難う御座居ました。 敬具

稚内市こまどり二丁目七一

国療稚内病院

小國 親久

(61・11・25)

御地の雪の便りを聞く季節になりました。本年も亦御厚情による「波久鳥」に逢ふ事が出来ました。年毎に、特に今回は一段と充実して編集の先生方の御苦心の程が伝はり大変嬉しく拝見させて頂きました。我家は長男が大学院修了母校の助手となり週二日、日立製作所(日立本社)病院に出向、次女は医薬情報のOLで二人共自宅から通勤致して居ります。

晩秋から初冬に姿を変へつつあるこの時季にはもう室蘭では「ななかまど」の赤い実も雪を被ってゐるのかと遥かに想ひを馳せて居ります。

諸先生方の御発展と御健勝を念じつつ、重ねて御礼申し上げます。併せて近況の御報告をさせて頂きました。

ありがとうございます。

可しこ

東京都大田区蒲田四丁目一十一

青山 芳江

(61・11・26)

前略 寒くなるばかりです。「波く鳥」第七号ご恵贈下さいましてありがとうございます。号を追う毎の充実うれしく存じます。

「編集室へのお便り」の欄に北原先生のおく様のお便りのあるのを見て、小雲水の名で書かれたありし日の先生の文章を思い出しております。では又一筆まで。

室蘭市幕西町一番一号

稲月 螢介

(61・11・27)

雪の舞う頃になりますと「波久鳥」が我が家に訪れる……

あの美しい高貴な白鳥にも似て季節もびつたり。

お写真などなつかしく拝見いたしました。旅行いたして居りまして御礼遅れ御無礼いたしました。

ますますの御発展たのしみにいたして居ります。

可しこ

札幌市北区新琴似七条二丁目一・二〇一

木谷 静子

(61・12・15)

あと一週間足らずで、もう十二月!! 今年も一ヶ月余で終るかと思ふと、満八十才

の誕生日が近づいた小生には、歳月の流れが益々早くなるのを通感する此頃です。

今年も亦なつかしい雑誌「波久鳥」第七号を御郵送下さって心から感謝申し上げます。諸先生の力作揃ひの内容は益々充実して面白く、会員の皆様の御活躍振りを偲ぶ何よりの贈物として楽しみに読ませてもらいます。

全国的に異常に早い冬の到来で、札幌は今日猛烈な吹雪とのテレビニュースを見て驚いて居りますが、南房州では、秋晴の小春日和が続いてまだまだ暖かく、老人にはこれからが天國の感じが致します。

グリーンピースと莢えんどうの種子時や玉葱苗の植付も終って本年の畑仕事は一応終って、あとは、さつま芋掘りと温州蜜柑の収穫を残すだけで農閑期に入りますのでゆつくりと拝読する事に致します。

長い間御世話になった室蘭製鉄所は残る一本の高炉も休止とか、お隣りの製鋼所も同様不況の波を受けて居る事と察します。で室蘭市内は益々鉄冷えの様相を呈して居るだろうと感慨無量です。

小生は変りなく健在、保健所の手伝や、町内老人クラブの相談医など引き受けて、元気で仕事を続けて居り、余暇を利用しては畑仕事にも精出して居りますが、家内が去る一月末に転倒して腰部を強打してから

は、不自由な脚が、益々弱って、殆んど床に就くようになり、十ヶ月余り経過し、未だに独りでは立ちあがれない状態で、その世話に手がかかって困って居ります。その為、八月には洞爺湖畔の墓参にも行けず、九月末、郷里山形の実家の法要に参列のため帰国した際、幸ひ留守番が居りましたので、東北新幹線を利用して大急ぎで渡道して墓参を果し、直ぐ引き返して帰宅致しました。

去る二十一日大島・三原山の大噴火の時その風圧が当地にも及んで家の南側のガラス戸が一日中ガタガタ揺れる音が激しく鳴って驚きました。

本格的な冬が訪れる今後は会員の諸先生には一層御体を御自愛下さい。

一筆受取りの御礼を申し上げます。

千葉県千倉町瀬戸二三六〇

高橋 清藏

(61・11・27)

長らく御無沙汰致し申し訳ありません。会誌「波く鳥」御送り頂き有難く拝見致しました。

北原先生、皆川先生の御逝去を初めて知りびつくり致しました。心よりお悔み申し上げます。

日立市大久保町一丁目の三 稲葉 眞

(61・12・5)

喪中につき新年のご挨拶ご遠慮させていただきます。

亡夫 幸七 長い間療養中のところ一月五日八十一才にて永眠いたしました。

生前の御交誼を感謝申し上げます。

茨城県水戸市千波町三九五の二

松岡 志げ子
(61・12・4)

大西檉子様からお礼の電話を頂きました。
(61・11・21)

計 報

会員 木戸 實先生が昭和62年9月15日病死されました。

ご冥福をお祈りいたします。

会 員 異 動

昭和61. 9 ~ 62. 9

年 月	事由	氏 名	備 考
60. 5	入 会	丸 田 浩	室蘭市常盤町2-11 市立室蘭総合病院 (第7号に掲載もれに付)
61. 9	転 出	小 林 滋 宗	江別市幸町22 谷藤病院
61. 9	転 出	小 國 親 久	稚内市こまどり2丁目7 国立療養所 稚内病院
61. 10	逝 去	三 村 貞 雄	室蘭市中島町3丁目32-15 三村病院
61. 5	入 会	石 川 秀 人	登別市中央町3丁目20 皆川外科内科病院
62. 8	入 会	高 橋 長 雄	登別市登別温泉町133 登別厚生年金病院
62. 9	逝 去	木 戸 実	室蘭市高砂町5丁目12-15 木戸みのる医院



本号は波久鳥の第八号として発刊されましたが、本年は室医親交会の生誕三十五周年に当たり、それを記念して会長上田智夫先生の御挨拶をはじめに、親交会行事略年表・在籍者一覧を掲げ、特に座談会「親交三十五年」をメインとして編集されました。

その座談会に参加して頂いた諸先生には紙面をお借りしてお礼を申し述べさせていただきます。座談会の中からも三十五年の歴史の重さが改めて感じられ、微力ながらその歴史を彩る会誌の編集委員として参加出来た事に誇りを感じている次第です。

記念寄稿として玉稿を賜りました長田・稲葉両先生の室医親交会に寄せられた切々な愛着の想いに心を打たれた次第です。そして、今度新しく御投稿いただいた川上、吉原、後藤、塩澤、皆川(芳)諸先生方にはこの紙面をお借りして厚くお礼の言葉を述べさせていただきます。また、安斎先生の音楽の散歩道はいつもながら尽きることのない音楽への憧憬の深さに唯々感服させられます。

これから次へと続くであろう波久鳥が、親交会の共に生きる会員の精神的

な拠り所として発展し続ける事を希望して止みません。本誌が皆様のお手許に届く時は、この室蘭の地に雪が散らついている頃と思います。いまこゝにあるゲラ刷りの小冊子を手にして、第八号も素晴らしい内容で飾ることの出来た満足感に浸りながら編集後記を書かせていただきました。

(三村 博通 記)

「波久鳥」八号編集委員

加 藤 治 良
村 井 玄
澤 山 直 彦 豊
児 玉 秀 雄
遠 藤 秀 彦
神 島 博 章
三 村 博 通
大 久 保 洋 平
青 木 茂

親交会会誌 波 久 鳥

発行日 昭和六十二年十二月五日
発行所 室蘭市医師親交会
印刷所 室蘭印刷株式会社